

『理趣経』読解ノート

本稿は、不空訳『般若理趣経』の原文と私訳、及び新版のサンスクリット原本(「苦米地本」)の原文と私訳である。ただし、老生草学道の愚考駄文であり学術資料ではない。

依用した「苦米地本」には「ロイマン本」と同様経文の欠落がある。「ロイマン本」で補えるところは「ロイマン本」で代替した。また不空訳とサンスクリット本の経文が処々一致しない。それぞれの原本が同じではないからである。

なおチベット訳は、類本の比較研究をはじめ、『理趣経』の成立史—広本と略本の関係等々—を学問的に研究する際、あるいはサンスクリット本の欠を補うため還梵をしたり、漢訳やサンスクリットの語意を確かめるのに不可欠な参照資料であるが、このノートは学術研究ではないのでサンスクリット本の和訳の参考程度にとどめた。

然らば先ず、『理趣経』の原典に関することから進めていきたいと思う。

現存する原典は次の十一本(実質十二本)である。

【略本】

●サンスクリット本

①『百五十頌の般若波羅蜜 Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā』:

エルンスト・ロイマン博士校訂本、Ernst Leumann, Zur Nordarischen Sprache und Literatur, S.84-99, 1912)。ここでは「ロイマン本」。

この「ロイマン本」をもとに校訂・編纂されたのが『梵蔵漢対照般若理趣経』(梅尾祥雲・泉芳環共編、智山勸学院、大正六年)で、サンスクリット文の校訂は主に泉芳環博士が担当し、萩原雲来博士の助力を得たと言う。すなわち、「ロイマン本」は実質的に原本と「智山勸学院(校訂)本」の二本があることになる。

②『Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā Sanskrit and Tibetan Texts』:

Critically edited by Toru Tomabechi, CHINA TIBETOLOGY PUBLISHING HOUSE, AUSTRIAN ACADEMY OF SCIENCES PRESS, 2009。

苦米地等流先生(一般財団法人人文情報学研究所 仏典写本研究部門 主席研究員)のご労作(以下、「苦米地本」)。

●漢訳本

③『般若理趣分』:

玄奘訳『大般若波羅蜜多経』第五七八卷、第十会「般若理趣分」一卷

④『実相般若経』:

菩提流支訳『実相般若波羅蜜経』一卷。

⑤『金剛頂理趣経』(『理趣般若経』):

金剛智訳『金剛頂瑜伽理趣般若経』一卷。

⑥『般若理趣経』:

不空訳『大楽金剛不空真実三摩耶経』「般若波羅蜜多理趣品」一卷。

⑦『仏説遍照般若経』:

施護訳『遍照般若波羅蜜経』一卷。

●チベット本

⑧『理趣百五十頌』:

『Hphags pa śes rab kyi pha rol tu phyin paḥi tshul brgya lña bcu pa』(『聖なる般若波羅蜜多の理趣百五十頌』)、訳者不明、東北目録四八九。

【広本】

●漢訳本

⑨『理趣広経』(『七卷理趣経』):

法賢訳『仏説最上根本大楽金剛不空三昧大教王経』七卷。

●チベット本

⑩『吉祥最勝本初儀軌』:

○前半部(般若分)－『Dpal mchog dañ po shes bya ba theg pa chen poḥi stog paḥi rgyal po』(『吉祥なる最勝の本初と名づけられる大乘の儀軌王』)、シュラッダーカラヴァルマン・リンチェンサンボ共訳、東北目録四八七。

○後半部(理趣分)－『Dpal mchog dañ poḥi snags kyi rtog paḥi dum bu shes bya ba』(『吉祥なる最勝の本初の真実儀軌部分と名づけられる(経)』)、マントラカラシャ・ハツエンポの共訳、東北目録四八八。

⑪『金剛場莊嚴儀軌』:

『Dpal rdo tje sñiñ po rgyan shes bya baḥi rgyud kyi rgyal po chen po』(『吉祥なる金剛道場の莊嚴と名づけられる大儀軌王』)、スガタシュリー・サキャバンディット、ロートウテンパ共訳、東北目録四九〇。

伝統教学が参照する参考文献に、

①『大楽金剛不空真実三摩耶経般若波羅蜜多理趣积』(『理趣积』)、『大正新脩大藏经』一〇〇三。

②『理趣経開題』(宗祖大師):『弘法大師空海全集』第三卷、筑摩書房

③『真実经文句』(宗祖大師):同

があり、

参考書を拾えば次のものが挙げられる。

①『理趣経の研究』榎尾祥雲(『榎尾祥雲全集』高野山大学密教文化研究所、臨川書店)

②『理趣経和訳』渡辺照宏(『渡辺照宏仏教学論集』筑摩書房)

③『理趣経達意』那須政隆(文政堂)

④『理趣経の研究 その成立と展開』福田亮成(国書刊行会)

⑤『理趣経』宮坂宥勝・福田亮成(大蔵出版、仏典講座16)

⑥『般若理趣経 理趣积』宮坂宥勝(『仏教聖典選』八)

⑦『理趣経』金岡秀友(『世界古典文学全集』七)

⑧『理趣経講讃』松長有慶(大法輪閣)

⑨『理趣経』松長有慶(中公文庫)

⑩『現代語訳 理趣経』正木晃(角川ソフィア文庫)

I 金剛界(九会)曼荼羅「理趣会」



当山本堂の金剛界曼荼羅「理趣会」部分

周知の通り、「金剛界(九会)曼荼羅」の右上のカドに移置するのが、『理趣経』に基づく「理趣会」マンダラである。

「金剛薩埵」①を中心に、下方(東)に「欲金剛菩薩」②、左下のカド(東南)に「欲金剛女菩薩」③、左方(南)に「触金剛菩薩」④、左上のカド(南西)に「触金剛女菩薩」⑤、上方(西)に「愛金剛菩薩」⑥、右上のカド(西北)に「愛金剛女菩薩」⑦、右方(北)に「慢金剛菩薩」⑧、右下のカドに「慢金剛女菩薩」⑨。

以上、「金剛薩埵」を含めて「五秘密尊」と、「欲」「触」「愛」「慢」(「四菩薩」)のパートナーの女(妃)菩薩。

さらに、その外側の枠内、左下のカド(東南)に「金剛嬉菩薩」⑩、左上のカド(南西)に「金剛鬘菩薩」⑪、右上のカド(西北)に「金剛歌菩薩」⑫、右下のカド(北東)に「金剛舞菩薩」⑬の「内四供養菩薩」と、

下方(東)に「金剛鉤菩薩」⑭、左方(南)に「金剛策菩薩」⑮、上方(西)に「金剛鎖菩薩」⑯、右方(北)に「金剛鈴菩薩」⑰の「四摂菩薩」が、集会している。

※「金剛界(九会)曼荼羅」全体や諸尊については、ウェブサイト「エンサイクロメディア空海」[マンダラ・デュアリズム]に詳しい。

II 経題・帰敬・序説分

■経題

(不空訳)

大樂金剛不空眞實三摩耶經 般若波羅蜜多理趣品

(同私訳)

「大樂」(「金剛薩埵」のサトリの境地と慈悲利他の実践における(相対的でない)絶対的な「安樂」と、それ(「大樂」)が「金剛」(ダイヤモンドのように堅固なもの)であり、また「不空」(世間に「利益」(福德)をもたらすもの)であり、また「眞實」(「一切如来」(五仏)の「教法」にかなったもの)であり、そして「三摩耶」(衆生と仏の双方に「等持」(平等撰持、生仏不二))であることを説くお経の、般若波羅蜜多(サトリ(到彼岸)の智慧)の理趣(道理)を説く章。

(苦米地本)

Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā

(同私訳)

百五十の(煩からなる)般若波羅蜜多(サトリ(到彼岸)の智慧)。

※経題について宗祖大師(『理趣経開題』)は、次のように釈している。

「大樂不空」=「金剛薩埵」の異名。

「大樂」=安樂のなかでもとくに殊勝な安樂。大日如来。

「金剛」=阿閼如来。

「不空」=「金剛薩埵」のサトリのとくに殊勝な安樂の境地と衆生を済度する大きな喜びの間に間断がないこと=「無間(むげん)」。宝生如来。

「眞實」=「金剛薩埵」のサトリのとくに殊勝な安樂や法爾の味わい。阿弥陀如来。

「三摩耶」=「等持」(平等撰持)=入我我入、または誓約。不空成就如来。

※然るに、ある参考書には、経題の「大樂金剛不空眞實三摩耶」とは「金剛のように堅固不壊=永遠にして空虚ならず眞実なる大いなる樂を与えることを本誓とする」「大樂にして金剛、不空にして眞実なる世界を悟らんとすの誓いの教え」とある。具体的な文意がよくわからない上に、教理的な意味づけの配慮も感じ取れない。「金剛」=永遠?「空虚ならず」「眞実なる」とは何を意味するのか、「(不空にして眞実なる)世界を悟らん」ほどの語からの現代語訳なのか、「三摩耶」は「本誓」でいいか。

私は宗祖大師(『理趣経開題』)の解釈に基本的に同意で、次のように解釈した。

○「大樂」は、大日如来の「法界体性智」(サトリの智慧)を得て、(そのサトリの智慧の実践である)大悲利他を行う「金剛薩埵」の、(世間的な損得などの相対を超えた)純粹で絶対的な安樂の境地。大日如来(仏部)の境地。

○「金剛」は、「大樂」がダイヤモンドのように堅固でゆるぎないこと。「大円鏡智」、阿閼如来(金剛部)の境地。

○「不空」は、「大樂」が世間に「利益」(実益)をもたらして、空疎ではなく実りあること。「平等性智」、宝生如来(宝部)の境地。宗祖大師の釈と言い方が少々異なるが、本質的には同じニュアンス。

○「眞實」は、「大樂」が「一切如来」の「教法」にかなっていること。「妙觀察智」、阿弥陀如来の境地。

○「三摩耶」は、「大樂」が(「金剛薩埵」の衆生済度によって)衆生(生)と如来(仏)ともに「等持」(平等撰持、生仏不二)であること。「成所作智」、不空成就如来(羯磨部)の境地。

然らば、先ほどの参考書の「三摩耶」を「本誓」とすることであるが、たぶん『理趣釈』から得たも

のと思われるが、実は『理趣釈』はこの経題の「三摩耶」については何も釈しておらず、「本誓」と言っているのは別な初段末尾の「心真言」の部分で、その冒頭の「一切如来大乘現證三摩耶」の「三摩耶」を「本誓」としている。これを経題の「三摩耶」の意味に転用したものと推察するが、いかななものか。経題の「三摩耶」には、「本誓」より上記のように「等持」(平等摂持、生仏不二)の方がふさわしいと私は思う。

※(眞實)三摩耶(經):この「三摩耶」は、初段末尾の「(説大樂金剛不空)三摩耶(心)」と同一で、原語は「samaya」に相違ない。不空はこの「samaya」を音訳で「三摩耶」とするだけで訳語を充てなかった。「samaya」については、この稿の末尾で少々述べるが、『理趣釈』を見ても「三摩耶」には種々の意味があつて一定しない。大師(『理趣経解題』)の「等持」(平等摂持) = 入我我入に私は同感・同意である。

■ 帰敬

(不空訳)なし

(苦米地本)

namo namaḥ sarva-buddha-bodhisattvebhyah //

namo bhagavatya ārya-prajñāpāramitāyai //

(同私訳)

一切の仏・菩薩に帰命し頂礼します。

尊くも聖なる般若波羅蜜多に帰命します。

■ 序説分

「毘盧遮那如来」(大日如来)が、「金剛薩埵」のために「一切(諸)法」((私たちが観想中に観ずる)観念(イデア)の基体とみなされるかたちや性質)は本来「清浄」である」という般若波羅蜜多(サト)の智慧を、『金剛頂経』系の密教的な「道理」(理趣)によって説く。

[序分]

[信成就]

(不空訳)

如是我聞

(同私訳)

是の如く、私は聞いた。

(苦米地本)

Evam mayā śrutam.

(同私訳)

このように、私は聞いた。

[時成就]

(不空訳)

一時

(同私訳)

(阿吽の呼吸が一致した)またとない機会に、

(苦米地本)

ekasmin samaye

(同私訳)

(「常恒説法」する法身大日如来と、それを聞く「金剛薩埵」ほかの菩薩たちの「阿吽の呼吸」が一致した)またとない機会に、

※「一時 ekasmin samaye」:通常「ある時」と訳すが、密教経典である『理趣経』の場合、「常恒説法」する法身大日如来と、それを聞く「金剛薩埵」ほかの菩薩衆の、文字通り「阿吽の呼吸」が一致した時という意味。

※大師はそれを、「一時」とは聞持和合して異時にあらざること」と言っている(『真実経文句』)。ある『理趣経』専門家筋の参考書は「その時」としているが、「永遠なる時」とも言っている。

〔(教)主成就〕

(不空訳)

薄伽梵 成就殊勝一切如来金剛加持三摩耶智 已得一切如来灌頂寶冠為三界主 已證一切如来一切智智瑜伽自在 能作一切如来一切印平等種種事業於無盡無餘一切衆生界一切意願作業皆悉圓滿常恒三世一切時身語意業金剛大毘盧遮那如来

(同私訳)

薄伽梵(=大日如来、以下世尊)は、一切如来の金剛(のように堅固なサトリ)によって加持された三摩耶(衆生と仏ともに等持(平等撰持))の智慧を殊勝に成就し(「大円鏡智」、すでに一切如来の灌頂の(しるしである五智の)宝冠によって、三界の主であることを得(「平等性智」、(また)すでに一切如来の一切智智によって、(その境地を得る)(三密)瑜伽も自由自在になることを証し(「妙観察智」、よく一切如来の一切の印(身密印・口密印・意密印・三密印)により(衆生と仏ともに)平等となって、種々の事業(利他行)を行い、尽きることもなく余すところもない一切衆生の世界において、一切の意願(心願)のはたらきを皆悉く円満せしめ(「成所作智」、常恒(永遠)に、過去・現在・未来の一切の時に、身・語・意(三密)のはたらきが金剛(のように堅固な)大毘盧遮那如来(「法界体性智」)は、

(苦米地本)

bhagavān sarva=tathāgata=vajra=adhiṣṭhāna=samaya=jñāna=vividha=aviśeṣa=samanvāgataḥ sarva=tathāgata=ratna=mukūṭa=trai=dhātuka=abhiṣeka=prāptaḥ sarva=tathāgata=sarvajñā=jñāna=mahā=yoga=iśvaraḥ sarva=tathāgata=sarva=mudrā=samatā=adhigato viśva=kārya=karaṇataya aśeṣa=anavaśeṣa=sattva=dhātu=sarva=āśā=paripūri=sarva=karma=kṛt mahāvairocanaḥ śāsvatas tryadhva=samanvāgata=ssthita=sarva=kāya=vāk=citta=vajras tathāgaḥ

(同私訳)

世尊は、「一切如来」(「五仏」)の「金剛」(のように堅固なサトリ=「五智」)によって加持された、(衆生と仏ともに)等持(平等撰持 samaya)の智慧を種々に殊勝に成就し(「大円鏡智」、
「一切如来」の(「五智」の)宝冠によって三界の「灌頂」を得て(「平等性智」、
「一切如来」の「一切智」の智によって大いなる(身・口・意の「三密」)「瑜伽」も自由自在となり(「妙観察智」、
「一切如来」のすべて(身密印・口密印・意密印・三密印)の「印」によって(衆生と仏ともに)平等(samatā、不二一如)であることを証し(「平等性智」、
一切の為すべきことを為すことにより、余すところなく残すところなく、衆生世界の一切の意願を円満し、一切の「利他行」を為す(「成所作智」、
大毘盧遮那—常恒なる者、三世の成就に住して、一切の身・口・意(の「三密」)が「金剛」(のように堅固な)「如来」は(「法界体性智」)、

※「三摩耶(智) samaya (=jñāna)」:ある参考書は、『理趣釈』の「三昧耶智とは、誓いなり、亦曼荼羅なり」を引きながら、この「三摩耶」を「曼荼羅の世界を悟る(智慧)」と言っている。ここは「大円鏡智」

を言うのではないか。ここで言う「三摩耶智」は「大円鏡智」のことであり、「大円鏡智」は「曼荼羅の世界を悟る智慧」なのか。私は大師(『理趣経解題』)が言う「等持(平等撰持)」(衆生と仏とが平等不二(生仏一如))の智慧ととった。(末尾に後述)

〔(住)処成就〕

(不空訳)

在於欲界他化自在天王宮中 一切如来常所遊處吉祥称歎大摩尼殿 種種間錯鈴鐸繪幡微風搖擊珠鬘瓔珞半満月等而為莊嚴

(同私訳)

欲界の他化自在天(六欲天の最高処)の天王宮のなかにあつて、(そこは)一切如来が常にくつろぎ、めでたいと称賛する大摩尼殿(摩尼宝珠で飾られた大きな宮殿)で、種々に入りまじって鈴鐸・絹の幡が微風にゆれ動き、宝珠の環や半月・満月の形をした飾りの瓔珞などで荘嚴されている。

(苦米地本)

sarvatathāgata=adhyuṣite praśasta=bhūṣite mahā=maṇi=ratna=pratyupte vicitra=varṇa=ghaṇṭā=avasakta=maruta=uddhūta=paṭṭa=patākā=sragdāma=cāmarahāra=ardhahāra=candra=upaśobhite sarva=kāmadhātu=upari=paranirmita=vaśa=vartino deva=rājasya bhavane vijahāra //

(同私訳)

「一切如来」の住処の、吉祥で飾られ、大きな摩尼宝珠や財宝で荘嚴され、種々の鈴鐸(風鐸のような大きな鈴)が懸けられ、風に揺れる絹の幡と、華鬘と瓔珞と半・満月の形の瓔珞で荘嚴された一切の「欲界」の最上部の「他化自在(天)」にあつて、天王の宮殿にくつろいでいる。

〔衆(=眷属)成就〕

【八大菩薩】

(不空訳)

與八十俱胝菩薩衆俱

所謂 金剛手菩薩摩訶薩 觀自在菩薩摩訶薩 虛空藏菩薩摩訶薩 金剛拳菩薩摩訶薩 文殊師利菩薩摩訶薩 纒發心轉法輪菩薩摩訶薩 虛空庫菩薩摩訶薩 摧一切魔菩薩摩訶薩 與如是等大菩薩恭敬圍繞 而為說法

(同私訳)

(そこに大日如来は)八億の菩薩衆とともにいた。

(それらは、)いわゆる、金剛手菩薩(金剛部)、觀自在菩薩(蓮華部)、虚空藏菩薩(宝部)、金剛拳菩薩(羯磨部)、文殊師利菩薩(金剛部)、纒発心轉法輪菩薩(蓮華部)、虚空庫菩薩(宝部)、摧一切魔菩薩(羯磨部)たちである。是の如き大菩薩たちに恭敬され围绕され、そして為に説法した。

(苦米地本)

aṣṭābhir bodhisattva=koṭibhiḥ sārddham /
tad=yathā vajra=pāṇinā ca bodhisattvena mahā=sattvena avalokita=iśvarena ca bodhisattvena mahā=sattvena ākāśa=garbheṇa ca bodhisattvena mahā=sattvena vajra=muṣṭinā ca bodhisattvena mahā=sattvena mañjuśrīyā ca bodhisattvena mahā=sattvena saha=citta=utpādita=dharma=cakra=pravartinā ca bodhisattvena mahā=sattvena gagana=gañjēna ca bodhisattvena mahā=sattvena sarva=māra=bala=pramardinā ca bodhisattvena mahā=sattvena//

evam pramukhābhir aṣṭābhir bodhisattva=koṭibhiḥ parivṛtaḥ puraskṛto dharmam deśayati sma /

(同私訳)

八億の菩薩たちと共におられた。

いわゆる、金剛手大菩薩(金剛部)、観自在大菩薩(蓮華部)、虚空蔵大菩薩(宝部)、金剛拳大菩薩(羯磨部)、文殊師利大菩薩(金剛部)、纒発心転法輪大菩薩(蓮華部)、虚空庫大菩薩(宝部)、摧一切魔大菩薩(羯磨部)たちである。是くの如く、上首の八億の菩薩たちに圍繞され恭敬され、法を説いた。

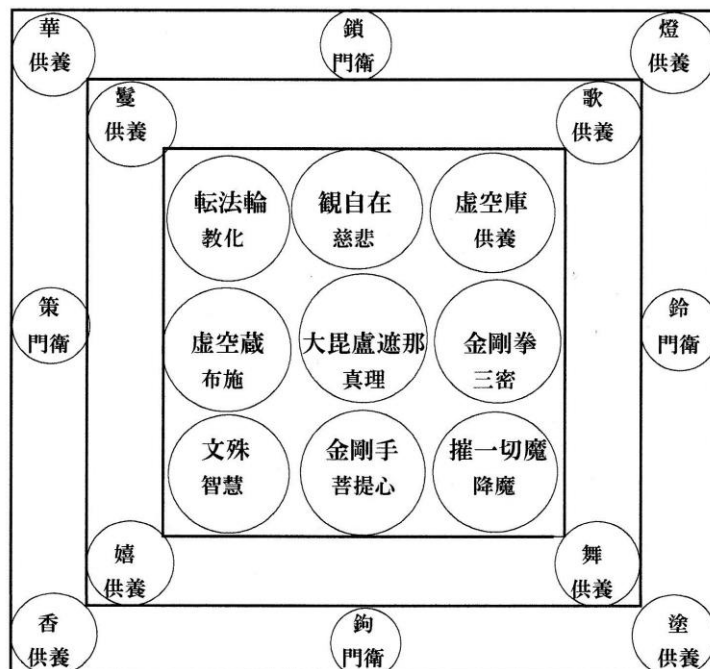
※「八大菩薩」：『理趣釈』によれば、

- 金剛手菩薩：初めて菩提心を発し、金剛菩薩の加持によって普賢の行願を修証。
- 観自在菩薩：一切如来の大悲を表す。一切有情の生死の雑染・苦悩を抜済。
- 虚空蔵菩薩：一切如来の真如、功德、福資糧聚を表す。四種の施を行す。
- 金剛拳菩薩：一切如来の三種の秘密が金剛拳菩薩の拳に在ることを表す。
- 文殊師利菩薩：一切如来の般若波羅蜜多の慧剣を表す。三解脱門に住し、能く真如・法身・常楽我浄を顕す。
- 纒発心転法輪菩薩：一切如来の四種輪を表す。四種智印によって十六大菩薩を成す。
- 虚空庫菩薩：一切如来の広大供養の儀を表す。虚空を以て蔵とし諸の有情を拯済・利益す。
- 摧一切魔菩薩：一切如来の大悲方便を表す。外に忿怒を示現し内に慈愍を懐く。

※「八十俱胝(菩薩衆)」「八億の(菩薩たち)」：

この「八億」を「八十億」とする説もある。漢訳の「八十」に、「俱胝 koṭi」を「億」とみて「八十億」としたのだろう。しかしサンスクリット原文は「aṣṭā-koṭi」で、「koṭi」を「億」とすると「八 aṣṭā 億 koṭi」である。ただし、「koṭi (koṭi)」には「千万」「億」「万億」「百千」「十万」「兆」という意味があり(『梵和辞典』)、数え切れないほど多いという意味合いが強い。

※『理趣釈』による「説会曼荼羅」(序説分)。



説会曼荼羅(序説分)

III 正説分

■正説分

●初段「大楽不空金剛薩埵初集会品」(金剛薩埵章、大楽の法門)

『理趣経』のテーマである、金剛薩埵の「大楽」の法門を説く。

『理趣釈』によれば、自性身の胎蔵界大日如来が「法界定印」に住し「三密」行によって自内証を説く。すなわち、法身大日が「金剛薩埵」の三摩地の境地から「十七清浄句」を例示し、密教の菩薩のサトリや智慧や実践の立場から言うと、男女の「愛欲」はもともと「自性」(その本性)が「清浄」なものであり、菩薩のステージでは煩惱に生きる衆生を救済せずにはいられない純粋な愛護の大悲＝「大楽」と同じだと説く。

※「大楽 mahāsukha」とは、冒頭の「経題」のところで述べた通り、「金剛薩埵」のサトリの境地とそのサトリの実践である大悲利他の純粋な喜びのことで、大乘の「空」の境地を密教的に教義化したものである。私は「純粋でゆるぎない絶対的な安楽」ととった。

この「大楽 mahāsukha」を「偉大なる快樂」と言う著名な密教研究者がおられるが、「偉大なる快樂」とはどんな「快樂」か。「mahā」(√ mahat)はたしかに、「偉大な」「大いなる」「巨大な」とか、仏典では「大」「廣大」といった意味であるが、何でも「大いなる」や「偉大な」とすればいいわけではない。「快樂」に「偉大な great」はどうか。

(不空訳)

初中後善文義巧妙純一圓滿清浄潔白

(同私訳)

初め、中頃、後に、善くして、言葉使いや意味が絶妙であり、ただひたすらに(＝純一)円満であり、清廉にして潔白なのであった。それは、初めも中頃も後も善く、文も意味も巧みで絶妙であり、ひとえに純粋で円満であり、清浄にして潔白なものであった。

(苔米地本)

ādau kalyāṇaṃ madhye kalyāṇaṃ paryavasāne kaliyāṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ
paripūrṇaṃ parisuddhaṃ paryavadātaṃ

(同私訳)

初めにおいて善く、中頃において善く、後半において善く、意味は殊勝であり、ことばは絶妙で、純一にして円満、「清浄」で潔白であった。

《釈義》

〔清浄句の法門〕

(不空訳)

説一切法清浄句門

(同私訳)

(すなわち、大日如来は)「一切(諸)法は清浄である」という句門を説いた。

(苔米地本)

sarvadharmā=viśuddhi=mukhaṃ brahma=caryaṃ sa prakāśayati sma //

yad uta sarvadharmā=svabhāva=viśuddhi=mukhaṃ nāma prajñāpāramitā=nayaṃ deśyati sma /

(同私訳)

(そこで)彼は、梵行即ち、「一切(諸)法」((私たちが観想中に観ずる)観念の持続不変の基体

とみなされるかたちや性質(属性)は「清浄」である」という「法門」を説いた。すなわち、「一切(諸)法」は自性「清浄」である」という「法門」と名づける般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

※「一切(諸)法 sarvadharma」:「法 dharma」を「存在」とか「存在するもの」と訳するのが仏教研究の世界では一般的で、私も「事物・事象」などと訳してきたのだが、このたび故あって、「(私たちが観想中に観ずる)観念の持続不変の基体とみなされるかたちや性質(属性)」と、言い換えることにした(末尾に詳述)。

【十七清浄句】

◆大楽金剛普賢延命金剛薩埵菩薩位

①(不空訳)

所謂 妙適清浄句是菩薩位

(同私訳)

いわゆる、「妙適は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苔米地本)

tad yathā surata=visuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

いわゆる、「(異性と)性的な恍惚の快樂は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「金剛薩埵」)の心位(境地、立ち位置)である。

※「妙適 surata」:『理趣釈』では、無縁の大悲を以て遍く無尽の衆生を縁じ、安楽利益を得んことを願う。心、曾て休息することなく自他平等無二の故に、蘇囉多(surata)と名づくるのみ。金剛薩埵の三摩地を修し、普賢菩薩の位を獲得す。

※大悲による「衆生」の済度をせずにはいられない「衆生」愛護の心が「衆生」と不二一体となっている境地を、男女が一体になった性的な快樂に喩えた「大楽」の境地。十七清浄の総論。

※「妙適」は、「金剛薩埵」(=普賢菩薩)の心位(境地)。

◆四親近菩薩位、愛欲の表現の四句(以下、「妙適清浄」の十六の具体的展開)

②(不空訳)

欲箭清浄句是菩薩位

(同私訳)

「欲箭は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苔米地本)

rāga=vāṇa=visuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「愛欲の矢は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「欲金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「欲箭 rāga=vāṇa」:『理趣釈』では、「金剛薩埵」の「四親近菩薩」欲金剛の三摩地を修し、欲金剛の位を獲得。

※「大楽」を求めて大いなる欲(=「大慾」)を発した(「欲金剛」菩薩の)境地。

③(不空訳)

觸清浄句是菩薩位

(同私訳)

「触は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

dveṣa=vahni=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲が昂じた)瞋りの火焰は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩の心位(境地)である。

※苦米地本はここに「dveṣa=vahni」を言う。

※「触」:『理趣釈』では、「金剛薩埵」の「四親近菩薩」金剛髻離吉羅菩薩の三摩地。金剛髻離吉羅菩薩の位を獲得。『真実経文句』では「触金剛」菩薩。

※「大楽」の境地に実際に触れた(「触金剛」菩薩の)境地。

④(不空訳)

愛縛清浄句是菩薩位

(同私訳)

「愛縛は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

sneha=bandhana=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「愛欲によって互いに固く縛られることは(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「愛金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「愛縛 sneha=bandhana」:『理趣釈』では、「金剛薩埵」の「四親近菩薩」愛縛金剛の三摩地。愛金剛の位を獲得。

※一切の「衆生」を済度しなければいけない(愛金剛)菩薩の大悲愛護の境地。

⑤(不空訳)

一切自在主清浄句是菩薩位

(同私訳)

「一切自在主は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

sarva=īśvarya=adhipatya=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛し合い、許し合い)すべてが自由自在であることに増上することは(本来)「清浄」である」という句(門)は、これすなわち菩薩(=「金剛傲」菩薩)の心位(境地)である。

※「一切自在主 sarva=īśvarya=adhipatya」:『理趣釈』では、「金剛薩埵」の「四親近菩薩」金剛傲の三摩地。金剛傲の位を獲得。

※一切の衆生を済度するため自在に活動する(「金剛傲」菩薩の)境地。

◆内供養菩薩位、愛欲の表現に伴う四句

⑥(不空訳)

見清浄句是菩薩位

(同私訳)

「見は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

dr̥ṣṭi=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲の対象としてお互いを)見ることは(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「意生金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「見 dr̥ṣṭi」:『理趣釈』では、意生金剛の三摩地。意生金剛の位を獲得。

※一切の衆生を済度する「利他行」によって、「大楽」の実相を見た(「意生金剛」菩薩の)境地。

⑦(不空訳)

適悦清浄句是菩薩位

(同私訳)

「適悦は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

rati=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲の快感に)満悦した悦びは(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「適悦金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「適悦 rati」:『理趣釈』では、適悦金剛の三摩地。適悦金剛の位を獲得。

※「大楽」に満悦した(「適悦金剛」菩薩の)境地。

⑧(不空訳)

愛清浄句是菩薩位

(同私訳)

「愛は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

tr̥ṣṇā=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「渴愛は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「貪金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「愛 tr̥ṣṇā」:『理趣釈』では、貪金剛の三摩地。貪金剛の位を獲得。

※さらに、衆生を済度する慈悲愛護の意欲を発してやまない(「貪金剛」菩薩の)境地。

⑨(不空訳)

慢清浄句是菩薩位

(同私訳)

「慢は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

garva=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲の快樂を)自慢することは(本来)「清淨」である」という句は、これすなわち菩薩(「金剛慢」菩薩)の心位(境地)である。

※「慢 garva」:『理趣釈』では、金剛慢の三摩地。金剛慢の位を獲得。

※一切の衆生を済度する活動にいつそう自信が増した(「金剛慢」菩薩の)境地。

◆外四供養菩薩位、四季(春夏秋冬)に関する四句

⑩(不空訳)

莊嚴清淨句是菩薩位

(同私訳)

「莊嚴は「清淨」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苔米地本)

bhūṣṇa=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲で)身を飾ることは(本来)「清淨」である」という句は、これすなわち菩薩(=「春金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「莊嚴 bhūṣṇa」:『理趣釈』では、春金剛の三摩地。春金剛菩薩の位を獲得。

※「見清淨」によって見た「大樂」の実相(例えば、「念」・「択法」・「精進」・「喜」・「輕安」・「定覚」・「捨覚」などの「七覚支」など)を身に付ける(「春金剛」菩薩の)境地。

⑪(不空訳)

意滋澤清淨句是菩薩位

(同私訳)

「意滋沢は「清淨」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苔米地本)

mano=āhlāda=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲が満たされて)心が爽快になることは(本来)「清淨」である」という句は、これすなわち菩薩(=「雲金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「意滋沢 mano=āhlāda」:『理趣釈』では、雲金剛の三摩地。雲金剛菩薩の位を獲得。

※心が満ち足りた(「雲金剛」菩薩の)境地。

⑫(不空訳)

光明清淨句是菩薩位

(同私訳)

「光明は「清淨」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苔米地本)

aloka=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(愛欲が満たされて、心に)明るい光がさすことは(本来)「清淨」である」という句は、これすなわち菩薩(=「秋金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「光明 āloka」:『理趣釈』では、秋金剛の三摩地。秋金剛菩薩の位を獲得。

※「五眼」(「肉眼」・「天眼」・「慧眼」・「法眼」・「仏眼」)等を得た(「秋金剛」菩薩の)境地。

※苦米地本はここに「kāya」(「身清浄」)を言い、すぐ次に「kāya=sukha」(「身楽」)を言う。

(不空訳)なし

(苦米地本)

kāya=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(性愛行為における)身体は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩の心位である。

⑬(不空訳)

身楽清浄句是菩薩位

(同私訳)

「身楽は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

kāya=sukha=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(性愛行為における)身体的な快樂は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「冬金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「身楽 kāya=sukha」:『理趣釈』では、冬金剛の三摩地。冬金剛菩薩の位を獲得。

◆四摂菩薩位、感覚器官の対象となる四句

⑭(不空訳)

色清浄句是菩薩位

(同私訳)

「色は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

rūpa=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(性愛における互いの)姿かたちは(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「色金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「色 rūpa」:『理趣釈』では、色金剛の三摩地。色金剛菩薩の位を獲得。

※仏の「三十二相」に加えて「八十種好」の身となった(「色金剛」菩薩の)境地。

⑮(不空訳)

聲清浄句是菩薩位

(同私訳)

「声は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

śabda=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(性愛の喜びの)声は(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「声金剛」菩薩)

薩)の心位(境地)である。

※「声 śabda」:『理趣釈』では、声金剛の三摩地。声金剛菩薩の位を獲得。

⑩(不空訳)

香清浄句是菩薩位

(同私訳)

「香は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

gandha=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(性愛で互いにわかる)匂いは(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「香金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「香 gandha」:『理趣釈』では、香金剛の三摩地。香金剛菩薩の位を獲得。

⑪(不空訳)

味清浄句是菩薩位

(同私訳)

「味は「清浄」なり」という句(門)は、是れ菩薩の心位(境地)である。

(苦米地本)

rasa=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam

(同私訳)

「(性愛で体感する)味わいは(本来)「清浄」である」という句は、これすなわち菩薩(=「味金剛」菩薩)の心位(境地)である。

※「味 rasa」:『理趣釈』では、味金剛の三摩地。味金剛菩薩の位を獲得。

※苦米地本では、「sparśa=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam」(「触清浄句」)がある。

※「触 sparśa」:『理趣釈』では、金剛髻離吉羅菩薩の三摩地。金剛髻離吉羅菩薩の位を獲得。

※苦米地本では、ここに「dharma=viśuddhi=padam etad yaduta bodhisattva=padam」(「法清浄句」)がある。

(不空訳)

何以故

一切法自性清浄故 般若波羅蜜多清浄

(同私訳)

何をもつての故に(何故かと言えは)、

一切(諸)法は自性が清浄だからである。それ故般若波羅蜜多も清浄である。

(苦米地本)

tat kasya hetoḥ /

tathā hi sarvadharmāḥ svabhāva=viśuddhāḥ sarvadharmā=svabhāvatayā prajñāpāramitā

viśuddhitā iti //

(同私訳)

それは、何の理由からか(何故か)。

このように、実に、「一切(諸)法」((私たちが観想中に観ずる)観念の持続不変の基体とみなされるかたちや性質(属性)。以下()書き補足は省略し「一切(諸)法」のみの表記とする)は自性「清浄」である。「一切(諸)法」の自性によって般若波羅蜜多是「清浄」である。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此清浄出生句般若理趣 乃至菩提道場一切蓋障及煩惱障法障業障 設廣積習必不墮於地獄等趣 設作重罪消滅不難 若能受持日日讀誦作意思惟 即於現生證一切法平等金剛三摩地 於一切法皆得自在 受於無量適悅歡喜 以十六大菩薩生獲得如來執金剛位

(同私訳)

金剛手(金剛薩埵)よ、もしこの(自性)清浄を出生する句(門)のサトリの智慧(般若)の道理(理趣)を聞く人あらば、乃し菩提道場(サトリの場所、サトリの精髓)に至るまで、一切の蓋障(障害)及び煩惱という障害や法という(ものを聞くことができない)障害や(宿)業という障害が、たとい広く習慣のようになって、かならず地獄等の悪趣に墮ちることはないであろう。(また)たとい重罪を犯しても(罪が)消滅することは難事ではないであろう。

もし、(この経を)よく受持して毎日読誦し心がけて思惟すれば、すなわち現世に生きている間、一切(諸)法を(自性清浄の境地で)平等(生仏不二)と観じる、金剛の(ように堅固な)三昧を証し、一切(諸)法において皆自在を得て、量り知れないほどの適悦の歡喜を受け、十六大菩薩(阿閼如來を囲む四菩薩、宝生如來を囲む四菩薩、阿彌陀如來を囲む四菩薩、不空成就如來を囲む四菩薩)の出生を以て、如來および金剛杵を手に持つもの(執金剛)の心位(境地)を獲得するだろう。

(苦米地本)

aḥ kaścid vajra-pāṇe imaṃ sarvadharmā-svabhāva-viśuddhi-pada-nirhāra-nāmadheyam sakṛd
api śroṣyati tasyā bodhi-maṇḍāt sarva-jñeya-āvaraṇa-kleśa-āvaraṇa-karma- āvaraṇāṇi mahā-anti
api upacinvato na kadācid api narakādi-apāya-upapattirhaviṣyati /
pāpāni ca kṛta-mātrāṇi aduḥkhataḥ kṣayaṃ yāsyanti /
yaś ca dhārayiṣyati dṇe dine vācayiṣyati svādhyāyiṣyati yoniśaś ca manasi-kariṣyati sa iha-eva-
janmani sarvadharmā-samatā-vajra-samādhi-anubhaviṣyati /
śoḍaśame mahā-bodhisattva-janmani tathāgatatvam pratilapsyate vajra- dharatvaṃ ca-iti //

(同私訳)

「金剛手」(=「金剛薩埵」)よ、誰であるかを問わず、この「一切(諸)法」は自性「清浄」である」という句を引き出す名字を一度聞けば、かの「菩提道場」(サトリの場所サトリの精髓)に至るまで、一切の所知障(サトリを覆う蓋障)や、煩惱障(煩惱に覆われる蓋障)や、業障(業によって覆われる蓋障)を(たとえ)広く積んでも、一度も地獄などの悪趣に墮ちることはあり得ない。また、重大に為された罪業に苦しむことなく、(それは)消滅する。

(また)誰でも(この経を)受持し、日々に読誦し、独り読誦し、思惟し、また作意する人は、彼は、現生において、実に「一切(諸)法」は(衆生と仏ともに)平等である」という「金剛」(のように堅固な境地=「三昧」)を得受する。「十六大菩薩」の出生において、如來の本性と「金剛」を持つもの(「執金剛」)の本性を獲得するだろう。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時薄伽梵 一切如來大乘現證三摩耶一切曼荼羅持金剛勝薩埵 於三界中 調伏無餘一切義

成就 金剛手菩薩摩訶薩 為欲重顯明此義故 熙怡微笑左手作金剛慢印右手抽擲 本初大金剛作勇進勢 說大樂金剛不空三摩耶心 吽引

(同私訳)

時に、世尊(大日如来)は、一切如来が大乘を現等覚する三摩耶(平等撰持)の一切の曼荼羅で、金剛(杵)を手に持つ勝れた薩埵(菩薩)であり、(欲界・色界・無色界の)三界において、(衆生を)余すところなく調伏し、一切の利益を成就する(一切義成就菩薩=釈尊と同等となる)。

金剛手菩薩は、重ねてこの義を明らかにしようと欲するがための故に、なごやかに(熙怡)微笑し、左手に金剛慢の印を作り(この左拳を腰にあて)、右手を(すべての存在の)本初を表象する大いなる(五鈷)金剛杵となして(三回)抽擲し、勇ましく進む勢いを示し、絶対的な安楽が金剛(のように堅固なサトリ)であり、空理ではない、等持(平等撰持、三摩耶)の心真言を説いた。吽引(うーん)。

(苦米地本)

atha bhagavān sarvatathāgata=mahāyāna=abhisamayāḥ sarva=maṇḍalaḥ sakala=vajra=dhātu=agrya=sattvaḥ sakala=traidhātuka=sarva=triloka=viṣṭi aśeṣa=avaśeṣa=sattva=dhātu=vinayana=samarthaḥ sarva=artha=siddhaḥ (sarva?) vajra=pāṇir mahā=samayo 'neka=vajra=mahā=guhya=sattva=parivāra imam eva prajñāpāramitā=naya=artham uddyotayan prahasita=vadanas tad ādyaṃ mahā=vajraṃ vāma=garva=ullālanatayā svahr̥t=karṣaṇa=yogena dhārayan idaṃ mahāsukha=vajra=amogha=samayaṃ nāma svatattva=hṛdayam agāt hūṃ //

(同私訳)

時に、世尊は、「一切如来」が大乘(=般若波羅蜜多)を現等覚する一切の曼荼羅(=「四種曼荼羅」)、(つまり)すべての「金剛界」で最勝の「薩埵」(菩薩)であり、すべての三界、一切の三界を「調伏」し、余すところなく残るものなく衆生界を「調伏」することができ、一切の「利益」「義」を成就している。

絶対的な「等持」(平等撰持 samaya)の「金剛手」は、無量の「金剛」の(ように堅固な)偉大な秘密の「薩埵」を随え、実に、この般若波羅蜜多の「道理」の意義を明らかにせんとし、微笑んだ面立ちで、左手を「(金剛)慢(印)」にして(左拳を腰にあて)、(右手の)本初なる大いなる(五鈷)金剛杵を振り動かして(抽擲して)自分の胸に引き当てて持し、この絶対的な「安楽」が「金剛」(のように堅固なサトリ)であり、利益をもたらす、「等持」(平等撰持)という名の、それ自体が真実である「心真言」を唱えた。フーム hūṃ。

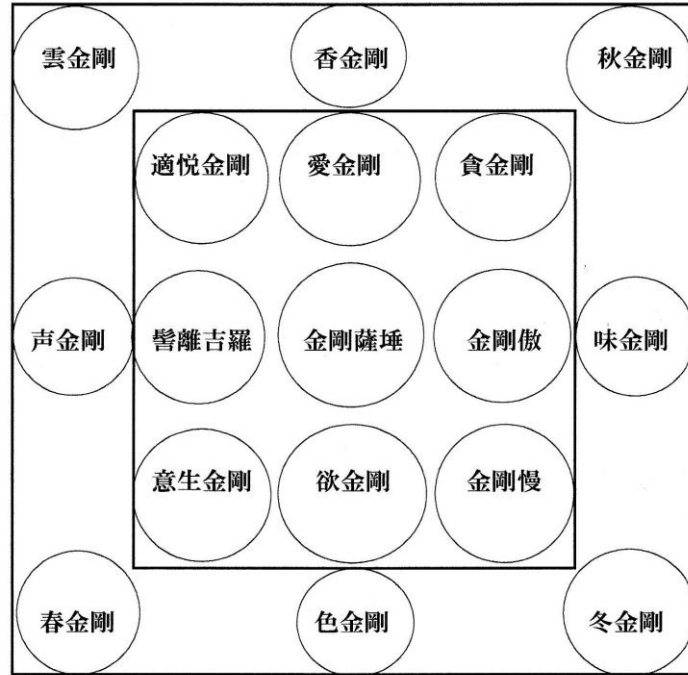
※「吽引 hūṃ」:金剛薩埵の種字。

『理趣釈』では、本誓の心真言は吽字なり。吽字とは因義なり。因義とは菩提心を因と為す。即ち一切如来の菩提心なり。この一字に四字(賀 ha・阿 a・汚 u・麼 ma)の義を具す。

※「(大乘現證)三摩耶(一切曼荼羅) samaya」を、『理趣釈』では「本誓」あるいは「時」「期契」、「曼荼羅」の異名だと言う。「本誓」をここに充てると「大乘の現証を「本誓」(とする)」となり、意味がよくわからない。然るに「大乘現證三摩耶」は、苦米地本では「mahāyāna=abhisamayāḥ」となっていて「三摩耶」に該当する語がなく、不空が「現證三摩耶」としているのは「abhisamayāḥ」という一つの語を「現証」と「三摩耶」という二通りに訳したやに思える。従って私は、苦米地本の「mahāyāna=abhisamayāḥ」により「大乘現證」「三摩耶」の「三摩耶」は無用と判断した。

また、「(大樂金剛不空)三摩耶(心)」は『理趣経』の経題の出元と思われる故、経題と同じように大師に倣い(「一切如来」のサトリの)「等持(平等撰持)」「(生仏不二)とした。

※『理趣釈』による「十七尊曼荼羅」



十七尊曼荼羅(初段)

●第二段「毘盧遮那理趣会品」(毘盧遮那章、証悟の法門)

以下、「大樂」の法門の實際を説く。「毘盧遮那如来」、すなわち「自受用身」(「智法身」=説法する法身)である大日如来が「智拳印」に住し、「一切如来」(「五仏」)のサトリ(現等覺)について、自分以外の「四仏」の「四智」も(衆生と仏ともに)「平等」であること(「四平等」)を説く。

[四平等]

- ①「金剛」平等:「金剛」(のように堅固なサトリ)が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)であること=「大円鏡智」(金剛波羅蜜菩薩)。
- ②「義」平等:(サトリの)「利益」が平等であること=「平等性智」(宝波羅蜜菩薩)。
- ③「法」平等:(衆生を導く)「教法」が平等であること=「妙觀察智」(法波羅蜜菩薩)。
- ④一切「業」平等:(「衆生済度」の)一切の「利他行」が平等であること=「成所作智」(羯磨波羅蜜菩薩)。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 毘盧遮那如来 復説一切如来寂靜法性現等覺 出生般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、毘盧遮那如来はまた、一切如来の寂靜なる法性の現等覺を出生する般若の理趣を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān vairocanaḥ tathāgataḥ punar api=imaṃ prajñāpāramitā=nayaṃ sarva=tathāgata=vajra=dharmatā=abhisambodhi=nirhāraṃ nāma deśayati sma

(同私訳)

時に、世尊、「毘盧遮那如来」(自受用身=智法身、自受法樂のために説法する法身としての

大日如来)はまた、「一切如来」の「金剛」の(ように堅固な)「法性」の現等覺を出生する般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 金剛平等現等覺以大菩提金剛堅固故 義平等現等覺以大菩提一義利故
法平等現等覺以大菩提自性清淨故 一切業平等現等覺以大菩提一切分別無分別性故

(同私訳)

いわゆる、金剛(の(ように堅固なサトリ)が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)であるという現等覺は、大菩提の金剛の(ように堅固なるを以ての故に。

(サトリの)利益が(衆生と仏ともに)平等であるという現等覺は、大菩提の(生仏)一致した利益(=一義利)をもつての故に。

(衆生を導く)教法が(衆生と仏ともに)平等であるという現等覺は、大菩提の自性清淨なるをもつての故に。

(衆生済度の)一切の利他行(業)が(衆生と仏ともに)平等であるという現等覺は、大菩提の一切の分別を無分別とする本性を以ての故に。

(苦米地本)

vajra=samatā=abhisambodho mahābodhir vajra=ḍḍhatayā /
artha=samatā=abhisambodho mahābodhir eka=arthatayā /
dharma=samatā=abhisambodho mahābodhiḥ sarva=dharma=viśuddhitayā /
sarva=samatā=abhisambodho mahābodhiḥ saravadharma=svabhāva=avikalpatayāiti //

(同私訳)

「金剛」(の(ように堅固なサトリ)が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)であるという現等覺は、大菩提が「金剛」の(ように堅固である本性によって。

(サトリの)「利益」が(衆生と仏ともに)平等であるという現等覺は、大菩提が(生仏ともに)一致した「利益」である本性によって。

(「衆生」を導く)「教法」が(衆生と仏ともに)平等であるという現等覺は、大菩提が一切の「教法」が「清淨」である本性によって。

一切(の「利他行」)が(衆生と仏ともに)平等であるという現等覺は、大菩提が「一切(諸)法」の自性「無分別」である本性によって。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此四出生法讀誦受持 設使現行無量重罪 必能超越一切惡趣乃至當坐菩提道場 速能尅證無上正覺

(同私訳)

金剛手よ、もしこの四つの出生の教法を聞いて(この理趣経を)読誦し受持する人あらば、たとひ現に無量の重罪を行つても、必ず一切の惡趣を超越し、乃至まさに菩提道場に坐し、すみやかによく無上の正覺を尅証すべし。

(苦米地本)

yaḥ kaścid vajra=pāṇe imāṃś caturo dharma=vihārāṃś cchroṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyati
bhāvayiṣyati sa sarva=pāpa=samācāro 'pi sarva=apāya=samatikrānto bhavaṣyati ā bodhimaṇḍāt /
kṣipraṃ ca=anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambodha=utsyata iti //

(同私訳)

「金剛手」よ、誰であるかを問わず、この四つの「教法」の楽しみを聞き、(この理趣経を)受持し、読誦し、修習する人は、その人は一切の悪業を行うとも、一切の「悪趣」を超越し、乃至サトリの場所(「菩提道場」)に坐し、またすみやかに最上の現等覚を得るであろう。

《(本誓の) (心) 真言》

(不空訳)

時薄伽梵 如是説已欲重顯明此義故熙怡微笑持智拳印 説一切法自性平等心 嚶引・重呼

(同私訳)

時に、世尊は、是の如く説き終つて、重ねてこの意味を明らかにせんとする欲する故に、微笑みの面立ちで智拳印を持し、一切(諸)法の自性が(衆生と仏ともに)平等であるという(本誓の)心真言を説いた。嚶引・重呼(あーく)。

(苦米地本)

atha=idam uktvā bhagavān jñāna=muṣṭi=parigraha idam eva=artha=padam bhūyasyā
mātrā=uddīpayan smita=mukha idaṃ sarvadharmā=samata=hṛdayam abhāṣat=vajra āḥ //

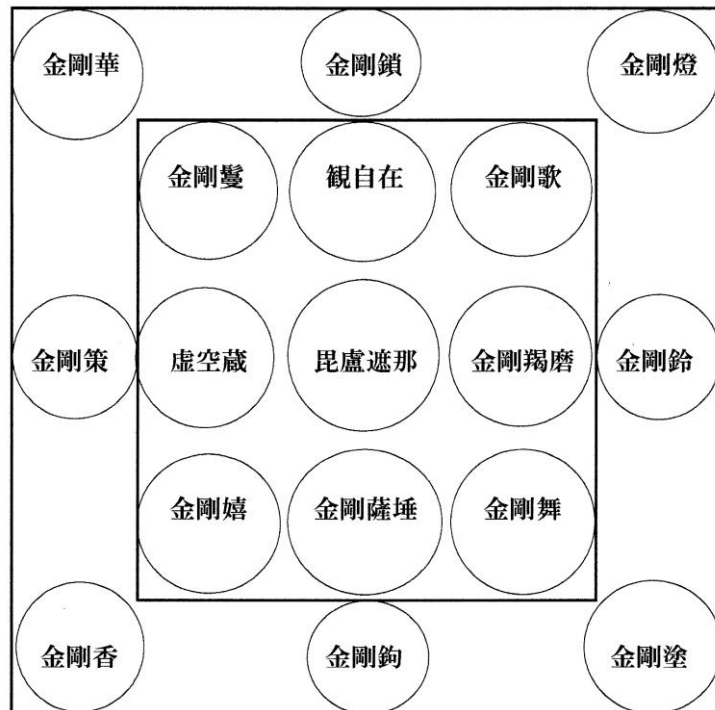
(同私訳)

時に、これを説き終つた世尊は、「智拳(印)」を結び、微笑みの面立ちで、実にこの利益の句(門)を、重ねて明らかにするため、この「一切(諸)法」が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)の「心真言」を説いた。「金剛」よ、アーハ āḥ。

※「嚶引・重呼 āḥ」:『理趣経』に説かれる大日如来の種字。

『理趣釈』では、悪引字とは、具に四字(ア a・アーā・アム am・アク ah)を含み、一体と為す。

※『理趣釈』による「毘盧遮那理趣会曼荼羅」



毘盧遮那理趣会曼荼羅(第二段)

●第三段「降三世品」(降三世章、降伏の法門)

大日如来が「釈迦牟尼如来」の三摩地に入り、「降三世(明王)」のサトリである「五種無戲論」によって、貪・瞋・痴(「三毒」)や般若波羅蜜多が煩惱による虚妄な分別論ではないこと(無戲論性)を説く。

この第三段は、『理趣経』の各段の構成上、教主は阿閼如来になるべきところ釈迦如来になっている(他の類本も一つを除いて同じ)。

釈尊成道の際、右手を大地に触れ(触地印)、大地をゆるがして女神を湧出させ、魔王を退散させた(降魔)、『ラリタヴィスタラ(大遊戯経)』エピソードから、この「触地」の手の形がやがて「降魔」すなわち「自らの煩惱を克服する」象徴として「触地印」「降魔印」と呼ばれるようになり、密教がこの「触地印」「降魔印」の釈尊を阿閼如来としたことから、この段の釈迦牟尼如来を阿閼如来と同一とする説がある。

〔五種無戲論〕(東方の四大菩薩の三摩地)

- ①慾無戲論性:貪欲が本来「清浄」であるという無戲論性。金剛薩埵の三摩地。
- ②瞋無戲論性:瞋恚が本来「清浄」であるという無戲論性。金剛王菩薩の三摩地。
- ③癡無戲論性:無知が本来「清浄」であるという無戲論性。金剛愛菩薩の三摩地。
- ④一切法無戲論性:「一切(諸)法」が本来「清浄」であるという無戲論性。金剛喜菩薩の三摩地。
- ⑤般若波羅蜜多無戲論性:般若波羅蜜多が本来「清浄」であるという無戲論性。

《標章》

(不空訳)

時調伏難調釋迦牟尼如来 復説一切法平等最勝出生般若理趣

(同私訳)

時に、調伏し難き(者)を調伏する釈迦牟尼如来はまた、一切(諸)法の(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)であることの最勝を出生する般若(サトリの智慧)の理趣(道理)を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān sarva=duṣṭa=vinayana=sākyamunis tathāgataḥ punar api sarva=dharama=samatā= vijaya=saṅgrahaṃ nāma prajñāpāramitā=nirhāram abhāṣata

(同私訳)

時に、世尊、一切の瞋恚を「調伏」する「釈迦牟尼如来」はまた、「一切(諸)法」の(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)による「調伏」の摂持と名づけられる般若波羅蜜多(サトリの智慧)の出生を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 慾無戲論性故瞋無戲論性 瞋無戲論性故癡無戲論性 癡無戲論性故一切法無戲論性 一切法無戲論性故應知般若波羅蜜多無戲論性

(同私訳)

いわゆる、

慾は(本来)無戲論性の故に、瞋は無戲論性のものである。

瞋は(本来)無戲論性の故に、無知(痴)は無戲論性のものである。

痴は(本来)無戲論性の故に、一切(諸)法は無戲論性のものである。

一切(諸)法は(本来)無戲論性の故に、まさに般若波羅蜜多は無戲論性である、

と知るべきである。

(苦米地本)

rāga=aprapañcatayā dveṣa=aprapañcatā / dveṣa=aprapañvatayā moha=aprapañcatā /
moha=aprapañcatayā saravadharma=aprapañcatā / sarvadharma=aprapañcatayā
prajñāpāramitā=aprapañcatā veditavyā iti //

(同私訳)

(貪)欲が(本来)無戲論性であるによって、瞋(恚)は無戲論性である。
瞋(恚)が(本来)無戲論性であるによって、無知(痴)は無戲論性である。
無知(痴)が(本来)無戲論性であるによって、「一切(諸)法」は無戲論性である。
「一切(諸)法」が(本来)無戲論性であるによって、般若波羅蜜多は無戲論性である、
と知られるべきである。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此理趣受持讀誦 設害三界一切有情不墮惡趣為調伏故疾證無上正等菩提

(同私訳)

金剛手よ、もしこの理趣を聞き、(この理趣経を)受持し読誦する人があらば、たとい三界の一切の有情を害しても悪趣に墮ちることはない。(三界を)調伏するが故にすみやかに無上の正等覚を証す。

(苦米地本)

yaḥ kaścid vajra=pāṇe imaṃ prajñāpāramitā=nayaṃ śroṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyati
bhāvayiṣyati tasya traidhātuka=upapannān api sarva=sattvān prapātayato na=apāya=gamaṇaṃ
bhaviṣyati vinaya=vaśam upādāya /
kṣipraṃ ca=anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambha=utsyata iti //

(同私訳)

「金剛手」よ、誰であるかを問わず、この般若波羅蜜多の「道理」を聞き、受持し、読誦し、修習する人は、たとい三界に生れる一切の「有情」(我執に生きる私たち人間)を殺傷しても、一切の悪趣に行くことはない。「調伏」が自在であるが故に、またすみやかに最上の正等覚を得るであろう。

※「設害三界一切有情不墮惡趣」は周知の通り、真言宗では『理趣経』の問題点と見られてきた。真言宗の伝統的な解釈はこれを、漢訳の「設(たとい)」「(不空訳)・「假令(たとえば)」「(菩提流支訳)・「假使」(=「假令」、玄奘訳)によってか、『理趣経』の受持・読誦・修習の結果功德としての仮定的な比喩とする。ただしチベット訳は直截的な表現で、「方便」による殺害が現実にあることを想像させる。またインド仏教でも、「大悲」「方便」を根拠にした教義的殺害を一定の前提のもとで容認するようなことが仏典には見られるという。ちなみに『理趣経』は、「害三界一切有情」「衆生」の「三毒」(「煩惱」)を殺し消滅させることとし、大師もそれに随って「如来の密意」と言っている。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時金剛手大菩薩 欲重顯明此義故 持三世印以蓮華面微笑 而怒頰眉猛視利牙出現降伏
立相 說此金剛吽伽羅心 吽短

(同私訳)

時に、金剛手大菩薩は、重ねて此の意味(義)を明らかにせんと欲する故に、(降)三世の印

を持し(結び)、蓮華のような面立ちで微笑しながらも、しかし怒ったように顔をひそめて眉をしかめ、猛々しくにらみ、尖った牙をむき出しにし、(諸魔を)降伏して立つ姿となって、この「金剛吽伽羅」の(一字真言である)(本誓の)心真言を説いた。吽短(うん)。

(苦米地本)

atha vajra-pāṇir imam eva dharmatā=artham bhūyasyā mātrayā=uddīpayams tri-loka=vijaya=
vajraṃ nāma mudrāṃ baddhvā sabhru=kuṭi=bhrū=bhaṅga=dīpta=dṛṣṭi=vihasita=ruṣita=iṣat=
damstrā=karāla=vadana=kamalaḥ pratyāliḍha=sthānastha idaṃ vajra=hūṃkāraṃ nāma hr̥dayam
abhāṣat vajra hūṃ //

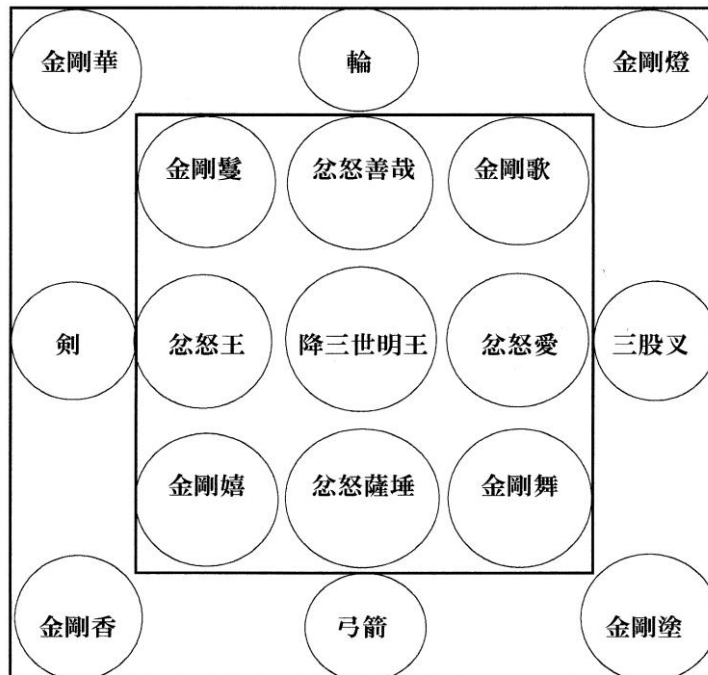
(同私訳)

時に、「金剛手」は、実に、この「法性」の意味を重ねて明らかにせんとし、「三界」を「調伏」する「金剛」と名づけられる「印」(「降三世印」)を結び、眉をひそめ、眉をしかめ、燃える目つきで、微笑し、瞋り、わずかに牙をむき出し、蓮華の面立ちで、左足を前に、右足を後ろに構えて立ち((諸魔を)降伏する立ち姿)となって、この「ヴァジュラ・フーム・カーラ vajra-hūṃ-kāra」の(「一字真言」である)「心真言」を説いた。「金剛」よ、フーム。

※「吽短 hūṃ」:降三世明王の種字 hūṃ。

苦米地本は hūṃ。漢訳・チベット訳は菩提流支訳の「憾長呼」以外すべて吽引 hūṃ。

※『理趣釈』による「降三世曼荼羅」



降三世曼荼羅(第三段)

●第四段「観自在菩薩理趣会品」(観自在章、観照の法門)

大日如来が「得自性清浄法性如来」すなわち「阿弥陀如来」(=「観自在王如来」、修行位では「観自在菩薩」)の「三摩地」に入り、「一切(諸)法」が自性「清浄」で雑染のないことなど、「観自在菩薩」のサトリの境地を説く。

〔四種清淨〕(西方の四大菩薩の三摩地)

- ①一切の(貪)慾が「清淨」の故に、一切の瞋(恚)は「清淨」である。金剛法菩薩。
- ②一切の垢が「清淨」の故に、一切の罪は「清淨」である。金剛利菩薩。
- ③「一切(諸)法」が「清淨」の故に、一切の有情は「清淨」である。金剛因菩薩。
- ④「一切智」の智が「清淨」の故に、般若波羅蜜多是「清淨」である。金剛語菩薩。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 得自性清淨法性如来 復説一切平等觀自在智印出生般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、自性清淨の法性を得た如来(阿弥陀如来)は、また、一切(諸)法の平等(生仏不二)を觀するに自在な智の印を出生する般若の理趣を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān svabhāva=śuddha=dharmatā=prāptas tathāgataḥ punar api=imaṃ sarvadharma-samatā=avalokiteśvara=jñāna=mudraṃ nāma prajñāpāramitā=naya=artham abhāṣata

(同私訳)

時に、世尊、自性「清淨」である「法性」を得た如来(「阿弥陀(無量寿)如来」)はまた、この「一切(諸)法」が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)であることを觀じること自在な「智印」(=「五智」の表象)という名の般若波羅蜜多の「道理」の意義を説いた。

《積義》

(不空訳)

所謂 世間一切慾清淨故即一切瞋清淨 世間一切垢清淨故即一切罪清淨
世間一切法清淨故即一切有情清淨 世間一切智智清淨故即般若波羅蜜多清淨

(同私訳)

いわゆる、

世間の一切の(貪)慾が(本来)清淨の故に、一切の瞋(恚)は清淨である。

世間の一切の垢が(本来)清淨の故に、一切の罪業は清淨である。

世間の一切(諸)法が(本来)清淨の故に、即ち一切の衆生は清淨である。

世間の一切智の智が(もとより)清淨の故に、即ち般若波羅蜜多是清淨である。

(苦米地本)

sarva=rāga=viśuddhitā loke sarva=dveṣa=viśuddhitāyai saṃvartate /
sarva=mala=viśuddhitā loke sarva=pāpa=viśuddhitāyai saṃvartate /
sarva=dharma=viśuddhitā loke sarvajña=jñānā=viśuddhitāyai saṃvartate /
sarvajña=jñānā=viśuddhitā loke prajñāpāramitā=viśuddhitāyai saṃvartate //

(同私訳)

世間において、一切の貪欲が「清淨」であることは、一切の瞋恚が「清淨」であることを得せしむ。

世間において、一切の垢れが「清淨」であることは、一切の惡業が「清淨」であることを得せしむ。

世間において、「一切(諸)法」が「清淨」であることは、「一切智智」が「清淨」であることを得せしむ。

世間において、「一切智智」が「清淨」であることは、般若波羅蜜多が「清淨」であることを得せしむ。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此理趣受持讀誦作意思惟 設住諸慾猶如蓮華 不為客塵諸垢所染 疾證無上正等菩提

(同私訳)

金剛手よ、もし、この理趣を聞き、受持し、読誦し、意を以て思惟する人あらば、たとひ諸欲に住するといえどもなお、蓮の花が客塵の諸垢に染まらないが如く、はやく無上の正等覺を証するだろう。

(苔米地本)

yaḥ kaścīd vajra-pāṇe imaṃ nayaṃ śroṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyati bhāvayiṣyati sa sarva-rāga-madhya-sthito 'pi padmaṃ iva rāga-doṣair na malair āgantukair lepaṃ yāsyati /
kṣipraṃ ca-anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambha-utsyata iti //

(同私訳)

「金剛手」よ、誰であるかを問わず、この「道理」を聞き、受持し、読誦し、修習する人は、彼は、(たとひ)一切の貪欲のなかにあっても、蓮の花のように、貪欲の悪業は客塵の垢れによって塗られることはない。また、速く無上の正等覺を覚るであろう。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時薄伽梵 觀自在大菩薩 欲重顯明此義故 熙怡微笑作開敷蓮華勢觀慾不染 說一切群生種種色心 紇利二合引入

(同私訳)

時に、世尊、觀自在大菩薩は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑を浮べて、開花した蓮の花の姿をとり、欲が(垢に)染まらないことを觀じ、一切の衆生の種々の姿や形に等しい(本誓の)心真言を説いた。紇利二合引入(きりく)

(苔米地本)

atha bhagavān avalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattva imam eva=artha-padaṃ bhūṣyā mātrayā=uddīpayan prahastita=vadanaḥ padma=pattra=vikāśanatayā rāga=adi= nirlepatām avalokayann idam sarava=jagad=viśva=rūpa=padmaṃ nāma hr̥dyam abhāṣata hr̥iḥ /

(同私訳)

時に、世尊、「觀自在大菩薩」は、実に重ねてこの句(門)の意義を明らかにせんとして、微笑みの面立ちで、開花した(紅)蓮花(の姿)によって、貪欲等が無垢であることを觀じ、この一切衆生の種々の姿や形(を象徴する)の(紅)蓮花という名の「心真言」を説いた。フリーヒ hr̥iḥ

※「紇利二合引入 hr̥iḥ」:觀自在菩薩の種字。

『理趣釈』では、紇利字に四字(賀 ha・囉 ra・伊 i・嚧 ah)を具して、一真言を成ず。

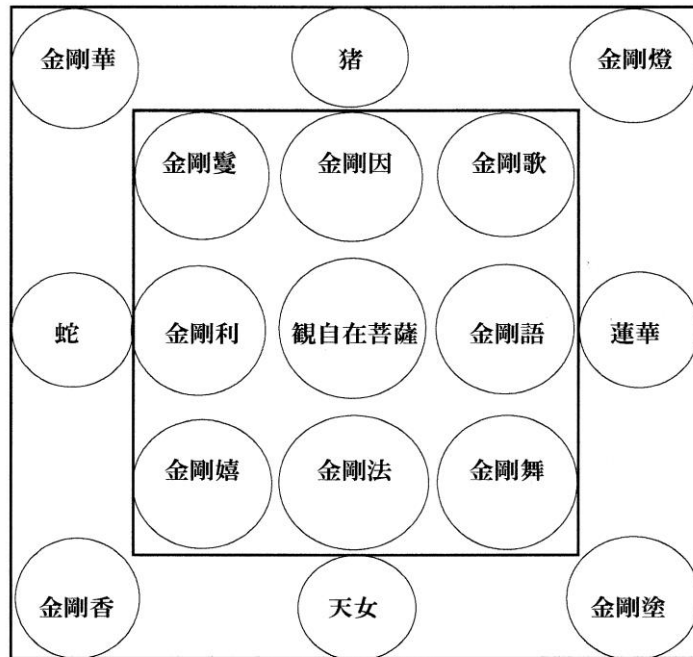
賀字門とは一切法の因不可得の義、

囉字門とは一切法の離塵の義、

伊字門とは自在不可得の義、

嚧字門とは惡字を名づけて涅槃となす。

※『理趣釈』による「觀自在菩薩理趣会曼荼羅」



觀自在菩薩理趣會曼荼羅(第四段)

●第五段「虚空蔵品」(虚空蔵章、富の法門)

大日如来が「一切三界主如来」すなわち「宝生如来」の「三摩地」に入り、「虚空蔵菩薩」のサトリの境地である「四種施」(=「宝生如来」を囲む「四菩薩」のサトリの境地)を説く。

[四種施](南方の四大菩薩の三摩地)

- ①「灌頂」施:「灌頂」の宝冠によって開頭された「五智」を真言行者に施すことにより、(宝冠を付けた)「宝生如来」の境地に入る。金剛宝菩薩。
- ②「義利」施:(比丘・沙門等の出家に金銭や資具等(財施)の)「利益」を施すことにより、一切の「意願」を満足させる。金剛光菩薩。
- ③「法」施:(天龍八部衆に)「教法」を施すことにより、一切の「教法」を会得させる。金剛幢菩薩。
- ④「資生」施:(畜生道にさまよう者に)飲食や物資を施すことにより、身・口・意(「三密」)の「安楽」を得させる。金剛笑菩薩。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 一切三界主如来 復説一切如来灌頂智藏般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、一切の三界主たる如来は、また一切如来の灌頂智(頭に五智の宝冠を付けることで開頭される五智)の蔵という般若の理趣を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān sarva=traidhātuka=adhipatis tathāgataḥ punar api sarvatathāgata=abhiṣeka=sambhava=ñāna=garbham nāma prajñāpāramitā=naya=artham abhāṣata

(同私訳)

時に、世尊、一切の三界の主たる如来は、また「一切如来」の「灌頂」が出生する智(=「五智」)の「蔵」という名の般若波羅蜜多の「道理」の意義を説いた。

《積義》

(不空訳)

所謂 以灌頂施故能得三界法王位 義利施故得一切意願満足
以法施故得圓滿一切法 資生施故得身口意一切安樂

(同私訳)

いわゆる、灌頂の施を以ての故によく三界の法王(=仏)の位を得る。義利の施の故に一切の
意願の満足を得る。法の施を以ての故に一切(諸法)の圓滿を得る。資生の施の故に身口
意の一切の安樂を得る。

(苔米地本)

abhiṣeka=dānaṃ sarva=traidhātuka=rājya=pratilambhāya saṃvartate /
artha=dānaṃ sarva=āśā=paripūryai saṃvartate /
dharma=dānaṃ sarvadharmā=samatā=prāptyai saṃvartate /
āmiṣa=dānaṃ sarva=kāya=vāk=citta=sukha=pratilambhāya saṃvartate //

(同私訳)

「灌頂」の施(「五智」を施すこと)は、一切の「三界」の王たることの成就を得せしむ。
「義利」の施(金銭・資具などの「利益」を施すこと)は、一切の「意願」の満足を得せしむ。
「教法」の施(「教法」を施すこと)は、「一切(諸法)」の平等(生仏不二)の満足を得せしむ。
「資生」の施(飲食や物資を施すこと)は、一切の身・口・意の「安樂」の成就を得せしむ。

《(本誓の) (心) 真言》

(不空訳)

時虚空蔵大菩薩 欲重顯明此義故 熙怡微笑 以金剛寶鬘自繫其首 說一切灌頂三摩耶寶
心 怛覽二合引

(同私訳)

時に、虚空蔵大菩薩は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑みを浮かべ、金剛の(よ
うに堅固な)宝珠の髪飾りを自ら首にかけ、一切の灌頂を本誓(三摩耶)とする宝(「五宝」)の
心真言を説いた。怛覽二合引(たら一ん)。

(苔米地本)

atha=ākāśa=garbho bodhisattvo mahāsattvaḥ prahastita=vadano bhūtvā svasīrasi vajra=ratna=
abhiṣeka=mālām avabandhayann imam eva dharmatā=arthaṃ bhūyasyā mātrayā=uddīpayann
sarva=abhiṣeka=samaya=ratnaṃ nāma hṛdayam abhāṣata trāṃ

(同私訳)

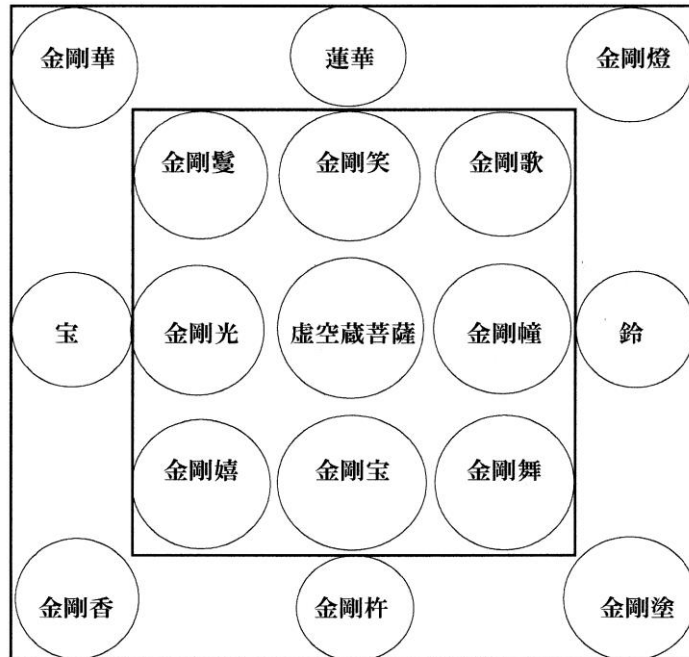
時に、「虚空蔵菩薩」大薩埵は、微笑みを浮かべ、「金剛」の(ように堅固な)宝珠を付けた「灌
頂」の花環を自らの頭に付け、実にこの「法性」の意義を重ねて説かんとして、一切の「灌頂」
を「本誓」とする宝(「五宝」=「五智」)と名づけられる「心真言」を説いた。トラーム trāṃ

※「怛覽二合引 trāṃ」:虚空蔵菩薩の種字。

『理趣釈』では、怛覽字とは四字(多 ta・囉 ra・阿引 ā・莽 m)を具し四種(真如不可得・離塵・一切法
の本来寂靜・一切法無我)の理趣行門を表わす。

※「(一切灌頂)三摩耶(寶心)samaya」:ここは、「(一切の(衆生を)「灌頂」(すること=五智を授ける
こと)を)「本誓」とする(宝(「五宝」)と名づけられる「心真言」)とした。(後述)

※『理趣釈』による「虚空蔵曼荼羅」



虚空蔵曼荼羅(第五段)

●第六段「金剛拳理趣品」(金剛拳章、実動の法門)

大日如来が「得一切如来智印如来」すなわち「不空成就如来」の三摩地に入り、「四種印」によって(真言行者が)「一切如来」の身・口・意及び「金剛」の表象(「印」=「曼荼羅」)を持することは「一切如来」の「三密」(身・口・意)と平等一如になるという「金剛拳菩薩」のサトリの境地を説く。

[四種(智)印](北方の四大菩薩の三摩地)

- ①「一切如来」の身体的な印(=手印)を持する(結ぶ)こと:「一切如来」の身になること。金剛業菩薩の三摩地、「身密印」、大曼荼羅。
- ②「一切如来」の言字的な印(=真言・種字)を持する(誦する)こと:「一切如来」の「教法」を得ること。金剛護菩薩の三摩地、「語密印」、法曼荼羅。
- ③「一切如来」の心意的な印(=観想)を持する(観ずる)こと:「一切如来」の「三摩地」を証すること。金剛葉叉菩薩の三摩地、「意密印」、三昧耶曼荼羅。
- ④「一切如来」の(身・口・意(三密)の)「金剛」のように堅固な印(=尊像)を持する(造顕すること):「一切如来」の身・口・意の最勝の悉地。金剛拳特任准教授の三摩地、「三密印」、羯磨曼荼羅(立体曼荼羅)。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 得一切如来智印如来 復説一切如来智印加持般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、一切如来の智印を得た如来は、また一切如来の智印による加持という般若の理趣を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān saravatathāgata-jñāna-mudrā-prāptaḥ sarvatathāgata- muṣṭi-dharaḥ sarva-

tathāgataḥ āśvataḥ punar api sarvatathāgata=jñāna= mudrā=adhiṣṭhāna=vajraṃ nāma
prajñāpāramitā=naya=artham ābhāṣata

(同私訳)

時に、世尊、「一切如来」の「智印」(「五智」の表象)を得て、「一切如来」の「拳」を持し、常恒なる「一切如来」となり、また「一切如来」の「智印」によって「加持」された「金剛」と名づけられる般若波羅蜜多の「道理」の意義を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 持一切如来身印即為一切如来身 持一切如来語印即得一切如来法 持一切如来心印
即證一切如来三摩地 持一切如来金剛印即成就一切如来身口意業最勝悉地

(同私訳)

いわゆる、一切如来の身印を持すれば、即ち一切如来の身となる。

一切如来の語印を持すれば、即ち一切如来の法を得る。

一切如来の心印を持すれば、即ち一切如来の三摩地を證す。

一切如来の金剛印を持すれば、即ち一切如来の身口意業の最勝悉地を成就する。

(苦米地本)

sarvatathāgata=kāya=mudrā=parigrahaḥ sarvatathāgatatvāya saṃvartate /
sarvatathāgata=vāc=mudrā=parigrahaḥ sarvadharma=pratilambhāya saṃvartate /
sarvatathāgata=citta=mudrā=parigrahaḥ sarva=samādhi=pratilambhāya saṃvartate /
sarvatathāgata=vajra=mudrā=parigrahaḥ sarva=kāya=vāk=citta=vajratva=uttama=siddhyai
saṃvartate //

(同私訳)

「一切如来」の身(密)印を持することは、「一切如来」たることを得せしめる。

「一切如来」の語(密)印を持することは、「一切(諸)法」を得せしめる。

「一切如来」の意(密)印を持することは、一切の「三摩地」を得せしめる。

「一切如来」の「金剛」の(ように堅固な)印を持することは、一切の身・口・意の「金剛」性の最上の成就(「悉地」)を得せしめる。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此理趣受持讀誦作意思惟 得一切自在一切智智一切事業一切成就 得一切
身口意金剛性一切悉地 疾證無上正等菩提

(同私訳)

金剛手よ、もしこの理趣を聞き(この経を)受持し、読誦し、意識して思惟する人ならば、一切の自在と一切智の智と一切の実践(事業)と一切の成就を得、一切の身・口・意の金剛の(ように堅固な)本性の一切の悉地(成就)を得、はやく無上の正等覺を証す。

(苦米地本)

yaḥ kaścid vajra=pāṇe imaṃ dharma=pariyāyaṃ śroṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyaty uddeksyati
bhāvayiṣyati sa sarva=siddhiḥ sarva=sampattiḥ sarva=jñānāni sarva=kāryāṇi sarva=kāya=vāk=
citta=vajratva=sarva=uttama=siddhiṃ ca pratilapsyate /
kṣipraṃ ca=anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambhotsyata iti //

(同私訳)

「金剛手」よ、誰であるかを問わず、この法門を聞き、受持し、読誦し、儀式を準備し、修習す

る人があらば、彼は一切の成就(「悉地」)者であり、一切の円満者であり、「一切智」者であり、一切の実践者であり、また一切の身口意の「金剛」性の最上の成就(=「悉地」)を得るであろう。また、速やかに無上の正等覚を覚るであろう。

《(本誓の) (心) 真言》

(不空訳)

時薄伽梵 為欲重顯明此義故 熙怡微笑 持金剛拳大三摩耶印 說此一切堅固金剛印悉地
三摩耶自眞實心 嚶

(同私訳)

時に、世尊は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑みを浮かべ、金剛拳の絶対的な平等摂持(三摩耶)の印を持し、この一切の堅固なる金剛印の悉地を本誓(三摩耶)とする、それ自体が眞実の心眞言を説いた。嚶(あく)。

(菩提地本)

atha bhabavān vajra=muṣṭir mahā=samaya=vajra=mudrā=parigraha imam eva=artham bhūyasyā
mātrayā=uddīpayan prahasita=vadana idaṃ sarva=dr̥ḍha=vajra=mudrā=siddhi=samayam nāma
hṛdayam abhāṣata aḥ //

(同私訳)

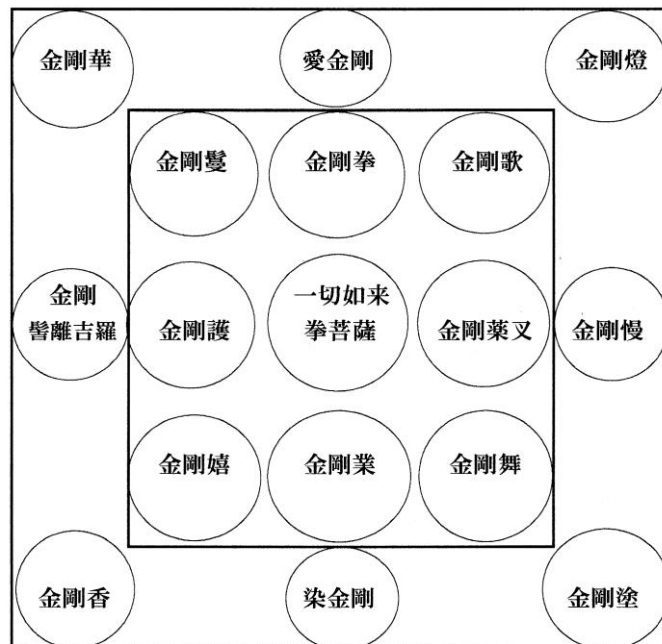
時に、世尊、「金剛拳(菩薩)」は、実に、この絶対的な平等摂持(samaya)の「金剛印」を持する意義を重ねて説かんとして、微笑みを浮かべ、この一切の堅固な「金剛印」の成就(「悉地」)を「本誓」とする、そう名づけられる「心眞言」を説いた。アハ aḥ

※「嚶 aḥ」:金剛拳菩薩の種子。

※「(持金剛拳)大三摩耶(印) samaya」:ここは「絶対的な「平等」(の「金剛印」)とした。(後述)

※「(金剛印悉地)三摩耶 samaya」:「「金剛印」の成就を「本誓」とする」とした。(後述)

※「理趣積」による「金剛拳理趣会曼荼羅」



金剛拳理趣曼荼羅(第六段)

●第七段「文殊師利理趣品」(文殊章、字輪の法門)

大日如来が「一切無戲論如来」の三摩地に入り、「文殊師利菩薩」の「転字輪観」により、第三段で「三毒」を「調伏」した「金剛薩埵」の内証たる「無相平等」の「菩提心」の智慧を説く。

※「五字真言」:ア(a)・ラ(ra)・ハ(pa)・シャ(ca)・ノウ(na)。

※「転字輪観」:「五字真言」の字義を順逆に観ずる「字輪観」。

「五字真言」の字義とは、「ア(阿)字諸法本不生」、「ラ(囉)字清浄無染着」、「ハ(波)字第一義諸法平等」、「シャ(者)字諸法無有諸行」、「ノウ(那)字諸法無有性相」。

[無相平等](四尊の利菩薩の三摩地)

①諸法は空性である。無自性と相応する故に。空観(金剛界曼荼羅の)金剛利菩薩の三摩地。

※金剛利菩薩:『金剛頂経(『真実撰経』)』の「金剛界品」が説く曼荼羅の金剛部の利菩薩。文殊菩薩と同体。

②諸法は無相である。無相性と相応するが故に。無相観(降三世曼荼羅の)忿怒金剛利菩薩の三摩地。

※降三世曼荼羅:初会『金剛頂経』降三世品の曼荼羅。

※忿怒金剛利菩薩:同じく降三世曼荼羅の宝部の忿怒利菩薩。どこに坐す菩薩か確認できず。

③諸法は無願である。無願性と相応する故に。無願観(遍調伏曼荼羅)蓮華利菩薩の三摩地。

※遍調伏曼荼羅:初会『金剛頂経』遍調伏品の曼荼羅。

※蓮華利菩薩:同じく遍調伏曼荼羅の蓮華部の利菩薩。どこに坐す菩薩か確認できず。

④諸法は光明である。般若波羅蜜多が「清浄」の故に。光明観(一切義成就曼荼羅の)宝利菩薩の三摩地。

※一切義成就曼荼羅:初会『金剛頂経』一切義成就品の曼荼羅。

※宝利菩薩:同じく一切義成就曼荼羅の羯磨部の利菩薩。どこに坐す菩薩か確認できず。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 一切無戲論如来 復説轉字輪般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、一切の戲論なき如来は、また字輪を転ずる般若の理趣を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān sarvadharmasamatā=aprapñcas tathāgataḥ punar api=imaṃ cakra=akṣara
parivartam nāma prajñāpāramitā=naya=artham anhāṣata

(同私訳)

時に、世尊、「一切(諸)法」の(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)に「戲論」無き如来はまた、この「転字輪」と名づけられる般若波羅蜜多の「道理」の意義を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 諸法空與無自性相應故 諸法無相與無相性相應故 諸法無願無願性相應故 諸法光明般若波羅蜜多清浄故

(同私訳)

いわゆる、諸法は空である。無自性と相応するが故に。諸法は無相である。無相性と相応するが故に。諸法は無願である。無願性と相応するが故に。諸法は光明である。般若波羅蜜多

は清浄の故に。

(苦米地本)

sūnyāḥ sarvadharmā niḥsvabhāvatā=yogena /animittāḥ sarvadharmā animittatām upādāya /
apraṇihitāḥ sarvadharmā apraṇidhāna=yogena /prakṛti=prabhāsvarāḥ sarvadharmāḥ
prajñāpāramitā=īśuddhyā //

(同私訳)

「一切(諸)法」は「空」である。無自性性に相応するによって。

「一切(諸)法」は「無相」である。無相性を以ての故に。

「一切(諸)法」は「無願」である。無願性に相応するによって。

「一切(諸)法」は本来、「光明」である。般若波羅蜜多が「清浄」であるによって。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時文殊師利童真 欲重顯明此義故 熙怡微笑 以自劒揮斫一切如来 以説此般若波羅蜜多
最勝心 菴

(同私訳)

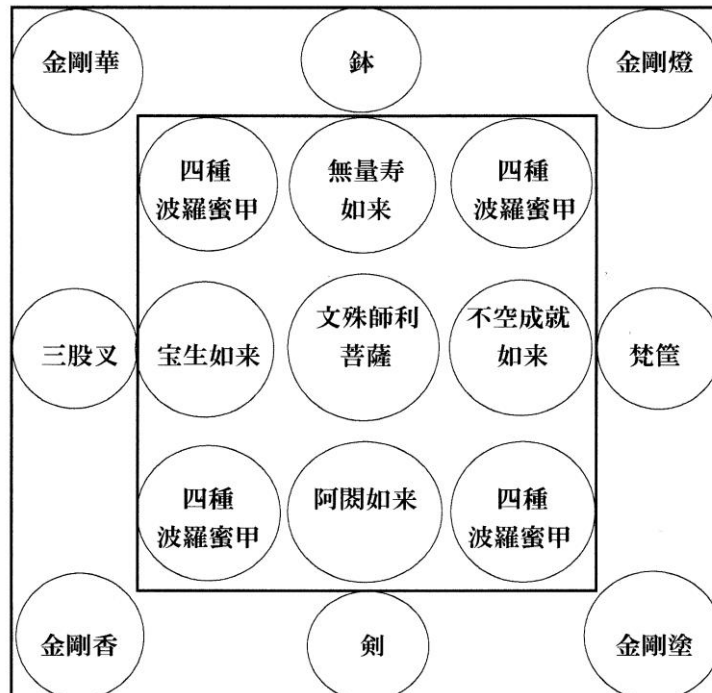
時に、文殊師利童真は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑みを浮かべ、自らの(智
慧の)劒をふるい、一切如来(のサトリを理解しない戯論)を切り、以てこの般若波羅蜜多の最
勝の(本誓の)心真言を説いた。菴(あん)。

(苦米地本)なし。

※ロイマン本にもない。

※「菴 am」:文殊師利菩薩の種字。『理趣釈』では、菴字とは覚悟の義。覚悟に四種あり。声聞の覚悟、
縁覚の覚悟、菩薩の覚悟、如来の覚悟。

※『理趣釈』による「文殊師利理趣会曼荼羅」



文殊師利理趣曼荼羅(第七段)

●第八段「纒發意菩薩理趣品」(纒發意章、入大輪の法門)

大日如来が「一切如来入大輪如来」の三摩地に入り、「纒發心轉法輪菩薩」のサトリの境地を説く。具には、第四段に説かれた「四種清淨」(「一切(諸)法」は自性「清淨」にして(衆生と仏ともに)平等(生仏不二))という、「觀自在菩薩」の境地を成就する方法を説く。

[四平等](「四輪」(初会『金剛頂經』四大品の四種曼荼羅)の三摩地)

- ①「金剛」(のように堅固なサトリ)が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)の境地に入ることは、「一切如来」の「金剛輪」に入ること(「金剛界輪」、初会『金剛頂經』金剛界品の曼荼羅)。
- ②(サトリの)「利益」が平等の境地に入ることは、偉大な菩薩の「忿怒輪」に入ること(「降三世輪」、初会『金剛頂經』降三世品の曼荼羅)。
- ③一切の「教法」が平等の境地に入ることは、正しい「教法」の「蓮華輪」に入ること(「遍調伏輪」、初会『金剛頂經』遍調伏品の曼荼羅)。
- ④(衆生済度の)一切の「利他行」が平等の境地に入ることは、一切の「利他行」の「羯磨輪」に入ること(「一切義成就輪」、初会『金剛頂經』一切義成就品の曼荼羅)。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 一切如来入大輪如来 復説入大輪般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、一切如来の大輪に入った如来は、また大輪に入る般若の理趣を説いた。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

atha bhagavān sarvatathāgata=cakra=antargatas tathāgataḥ punar api mahā=cakra=praveśam
nāma prajñāpāramitā=nayaṃ deśayām āsa

(同私訳)

時に、世尊、「一切如来」の「大輪」(金剛界大曼荼羅)に入った如来は、また、「大輪」に入ると名づけられる般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

《積義》

(不空訳)

所謂 入金剛平等則入一切如来法論 入義平等則入大菩薩輪

入一切法平等則入妙法輪 入一切業平等則入一切事業輪

(同私訳)

いわゆる、金剛(のように堅固なサトリ)が平等(生仏不二の境地)に入ること は、一切如来の法輪に入ることである。

(サトリの)利益が平等に入ることは、偉大な菩薩の輪に入ることである。

一切の教法が平等に入ることは、正しい教法の輪に入ることである。

一切の利他行が平等に入ることは、一切の利他行の実践の輪に入ることである。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

vajra=samatā=praveśaḥ sarvatathāgata=cakra=praveśaya saṃvartate
artha=samatā= praveśo mahābodhisattva=cakra=praveśaya saṃvartate
dharma=samatā=praveśaḥ sarvadharmā=cakra=praveśaya saṃvartate
sarva=samatā=praveśaḥ sarva=cakra=praveśaya saṃvartata iti ram

(同私訳)

「金剛」(ように堅固なサトリ)が(衆生と仏ともに)平等(の境地)に入ることは、「一切如来」の「輪」(「金剛輪」、初会『金剛頂経』金剛界品の曼荼羅)に入ることを得せしめる。
 (サトリの)「利益」が平(衆生と仏ともに)等(の境地)に入ることは、偉大なる菩薩の「輪」(「忿怒輪」=「宝輪」(「降三世輪」、初会『金剛頂経』降三世品の曼荼羅)に入ることを得せしめる。
 「教法」が(衆生と仏ともに)平等(の境地)に入ることは、一切の「教法」の「輪」(「蓮華輪」=「法輪」(「遍調伏輪」、初会『金剛頂経』遍調伏品の曼荼羅)に入ることを得せしめる。
 「一切(諸)法」が(衆生と仏ともに)平等(の境地)に入ることは、一切の「輪」(「羯磨輪」=「一切義成就輪」、初会『金剛頂経』一切義成就品の曼荼羅)に入ることを得せしめる。ラム

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時纒發心轉法輪大菩薩 欲重顯明此義故 熙怡微笑轉金剛輪說一切金剛三摩耶心 吽

(同私訳)

時に、纒發心轉法輪大菩薩は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑みを浮かべ、金剛の(ように堅固な)(八幅の)輪宝(法輪)を(空中に)転じ、すべての金剛(界の四種曼荼羅)に入ることを「本誓」(三摩耶)とする心真言を説いた。吽(うーん)

(苔米地本)なし。

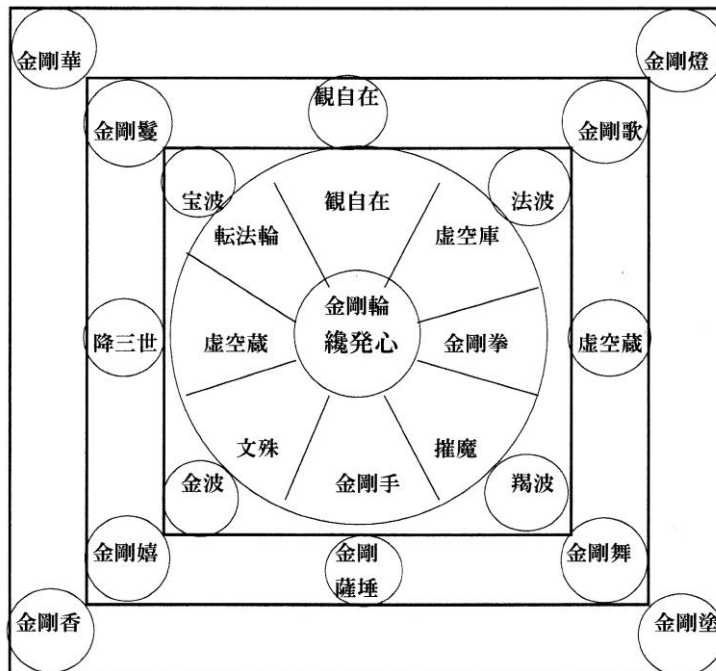
※ロイマン本にもない。

※「吽 hūṃ」:纒發心轉法輪菩薩の種字。

『理趣釈』では、吽字は四輪の義を具す。

※「三摩耶(心)samaya」:ここは、「本誓」とする(心真言)」、とした。

※『理趣釈』による「纒發意菩薩理趣曼荼羅」



纒發意菩薩理趣曼荼羅(第八段)

●第九段「虚空庫菩薩理趣品」(虚空庫章、供養の法門)

大日如来が「一切如来種種供養藏廣大儀式如来」の三摩地に入り、「虚空庫菩薩」のサトリの境地である「一切如来」に対する「四供養」を、すなわち第五段に説かれる「虚空蔵菩薩」の福德実践の境地を説く。

〔四供養〕(内四供養菩薩の三摩地)

- ①「菩提心」(白淨信心)を發起することは、諸如来の広大な供養である。金剛嬉(女)菩薩、金剛部。
- ②一切衆生を救済することは、諸如来の広大な供養である。金剛鬘(女)菩薩、宝部。
- ③仏典を受持することは、諸如来の広大な供養である。金剛歌(女)菩薩、蓮華部。
- ④般若波羅蜜多(=理趣経)を受持し、読誦し、自書し、他に書写を教え、思惟し、修習し、種種の供養を行うことは、諸如来の広大な供養である。金剛舞(女)菩薩、羯磨部。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 一切如来種種供養藏廣大儀式如来 復説一切供養最勝出生般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、一切如来を種種に供養する(供物の)藏を持ち廣大な儀式(=供儀)を執り行う如来は、また一切の供養の最勝を出生する般若の理趣を説いた。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

atha bhagavān sarva=pūjā=vidhi=vistara=bhājanas tathāgataḥ punar api sarva=pūjā=agryam
nāma prajñāpāramitā=nayaṃ deśayām āsa

(同私訳)

時に、世尊、一切の供養の儀式(の供物を入れる)広大な器(「藏」)である如来は、また、一切の(曼荼羅諸尊の)供養の最勝と名づけられる般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 發菩提心則為於諸如来廣大供養 救濟一切衆生則為於諸如来廣大供養 受持妙典則為於諸如来廣大供養 於般若波羅蜜多受持讀誦自書教他書思惟修習 種種供養則於諸如来廣大供養

(同私訳)

いわゆる、菩提心(白淨信心)を發起することは、則ち諸如来への広大な供養である。

一切の衆生を救済することは、則ち諸如来への広大な供養である。

妙典を受持することは、則ち諸如来への広大な供養である。

般若波羅蜜多(=理趣経)を受持し讀誦し自ら書き写し他に教えて書写させ思惟し修習し種々に供養することは、諸如来への広大な供養である。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

bodhi=citta=utpādanatā sarvatathāgata=pūjā=vidhi=virtaraḥ sarva=sattva=dhātu=paritrāṇatā
sarvatathāgata=pūjā=vidhi=vistaraḥ saddharma=parigrahaḥ sarvatathāgata=pūjā=vidhi=vistaraḥ
prajñāpāramitā=likhana=lekhana=dhāraṇa=vācana=uccāraṇa=bhāvana=pūjana=karmanah
sarvatathāgata=pūjā=vidh=vistara iti om

(同私訳)

「菩提心」を發起することは、(金剛部の)「一切如来」への供養の広大な儀式である。
すべての衆生界を済度することは、(宝部の)「一切如来」への供養の広大な儀式である。
妙法を受持することは、(蓮華部の)「一切如来」への供養の広大な儀式である。
般若波羅蜜多(=理趣経)を書写し、書写し、受持し、読誦し、讀誦し、修習し供養し、実践することは、(羯磨部の)「一切如来」への供養の広大な儀式である。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時虚空庫大菩薩 欲重顯明此義故 熙怡微笑 説此一切事業不空三摩耶一切金剛心 唵

(同私訳)

時に、虚空庫大菩薩は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑みを浮かべ、この一切の実践(事業)が利益をもたらすこと(不空)を「本誓」(三摩耶)とする、一切の金剛の(ように堅固な)心真言を説いた。唵(おーん)

(苦米地本)なし。

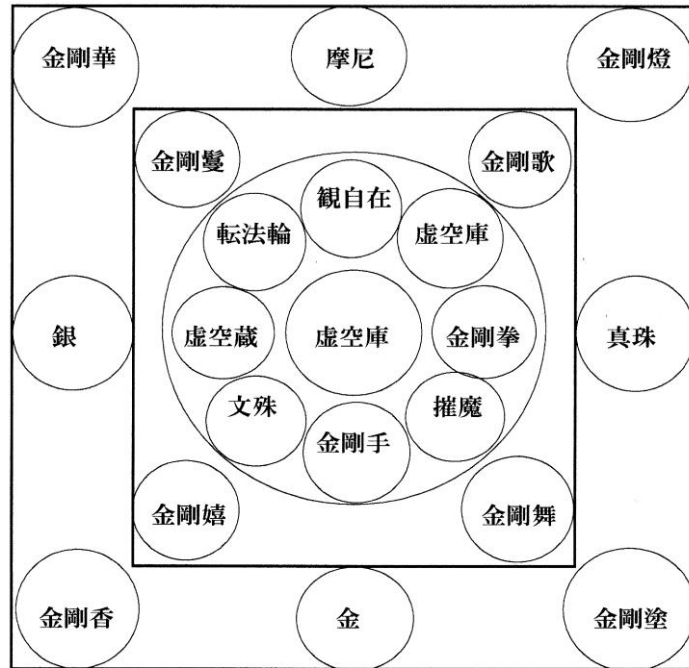
※ロイマン本にもない。

※「唵 om」:虚空庫菩薩の種字。

『理趣釈』では、唵字に三身の義あり。亦無見頂上義に名づけ、亦本不生義に名づけ、亦是如来毫相功德義なり。すなわち、唵 om=a(本不生)・u(無見頂上)・m(a)(如来毫相功德)。

※「(一切事業不空)三摩耶」:ここは「(一切の実践(事業)が「利益」をもたらすことを)「本誓」とする」とした。

※『理趣釈』による「虚空庫菩薩理趣曼荼羅」



虚空庫菩薩理趣曼荼羅(第九段)

●第十段「摧一切魔菩薩理趣品」(摧魔章、忿怒の法門)

大日如来が「能調持智拳如来」の三摩地に入り、「忿怒」行により「摧一切魔菩薩」の「四種(智)印」の境地を説く。

〔四種忿怒〕(四部の三摩地)

- ①忿怒平等:「忿怒」行は「平等」(生仏不二)である。金剛部中の、降三世明王。
- ②忿怒調伏:「忿怒」行は「調伏」である。宝部中の、宝金剛忿怒。
- ③忿怒法性:「忿怒」行は「法性」である。蓮華部中の、馬頭忿怒觀自在菩薩。
- ④忿怒金剛性:「忿怒」行は「金剛」性である。羯磨部中の、羯磨。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 能調持智拳如来 復説一切調伏智藏般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、よく(一切を)調(伏)し(金剛)智拳(忿怒拳)を持する如来は、また一切(の諸魔)を調伏する(忿怒の)智の藏という般若の理趣を説いた。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

atha khalu bhagavān sarva=vinaya=samarthas tathāgataḥ punar api=imaṃ jñānā=muṣṭi=parigrahaṃ sarvasattva=vinaya=jñāna=garbhaṃ nāma prajñāpāramitā=nayaṃ deśayām āsa

(同私訳)

時に、実に世尊、一切衆生をよく「調伏」する如来は、また、この「智拳」を受持し一切の衆生を「調伏」する「智蔵」(「智拳」)と名づけられる般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 一切有情平等故忿怒平等 一切有情調伏故忿怒調伏 一切有情法性故忿怒法性
一切有情金剛性故忿怒金剛性 何以故 一切有情調伏則為菩提

(同私訳)

いわゆる、一切の有情は平等(生仏不二)の故に、忿怒は平等(生仏不二)である。

一切の有情を調伏するが故に、忿怒は調伏である。

一切の有情は法性成るが故に、忿怒は法性である。

一切の有情は金剛性なるが故に、忿怒は金剛性である。

何を以ての故に(何故か)。一切の衆生を調伏することはすなわち、サトリとなるから。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

sarvasattva=samatayā krodha=samatā sarvasattva=vinayanatayā krodha=vinayanatā
sarvasattva=dharmatayā krodha=dharmatā sarvasattva=vajratayā krodha=vajratā
tat kasya hetoḥ

tathā hi sarvasattva=vinayo bodhir iti ha

(同私訳)

一切の「有情」が「平等」性(仏と不二)であるによって、「忿怒」は平等性(生仏不二)である。

一切の「有情」は「調伏」性であるによって、「忿怒」は「調伏」性である。

一切の「有情」は「法性」であるによって、「忿怒」は「法性」である。

一切の「有情」は「金剛」性であるによって、「忿怒」は「金剛」性である。
 それは何の理由か(何故か)。このように、実に一切の「有情」を「調伏」することがサトリである
 からである。ハ

※「一切有情 sarva-sattva」を「生きとし生けるもの」と現代語訳している研究者がいるが、おかがか？
 普通には「感情・意識などの精神作用を有する(人間などの)生きもの」という意味で、精神作用をも
 たない植物などの「非情」に対する「有情」である。私は「有情」を「三界」をさまよい生死をくり返す
 煩惱具足の私たち人間」と理解している。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時摧一切魔大菩薩 欲重劍明此義故 喜喜微笑 以金剛藥叉形持金 剛牙恐怖一切如来已
 説金剛忿怒大咲心 郝

(同私訳)

時に、摧一切魔大菩薩は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、微笑みを浮かべ、金
 剛藥叉(夜叉、忿怒形の護法神)の姿になって、金剛牙(印)を持し、一切如来をも恐れさせ終
 わって、金剛の(ように堅固な)忿怒の大笑いの心真言を説いた。郝(かく)

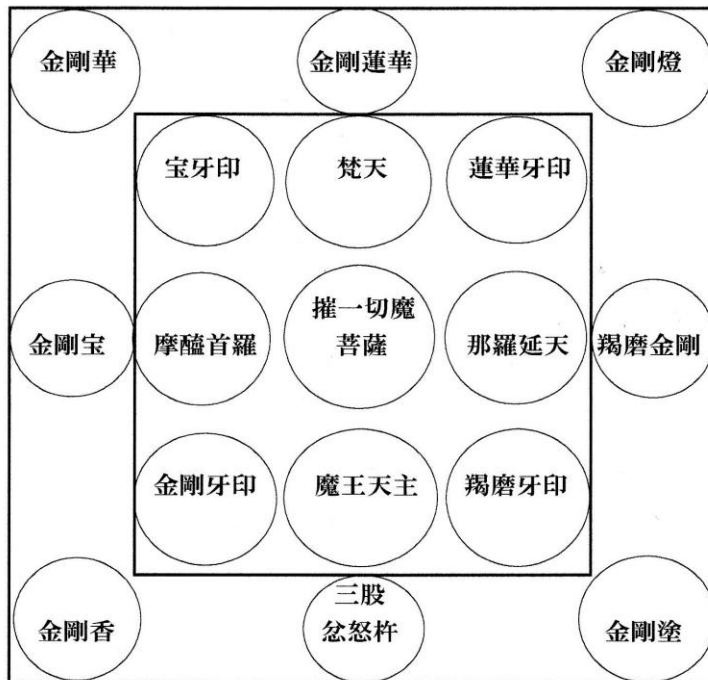
(苦米地本)なし。

※ロイマン本にもない。

※「郝 haḥ」:摧一切魔菩薩の種字。

『理趣釈』では、郝字は四義を具す。一切法本不生の義、因の義、二種の我の義なり。

※『理趣釈』による「摧一切魔菩薩理趣曼荼羅」



摧一切魔菩薩理趣曼荼羅(第十段)

● 第十一段 「降三世教令輪品」(降三世教令輪章、普集の法門)

大日如来が「一切平等建立如来」の三摩地に入り、「金剛手菩薩」(「普賢菩薩」)のサトリの境地、すなわち般若波羅蜜多の「四種性」と、その表象としての「四部の大曼荼羅」が説かれる。

〔四種性〕(四部の大曼荼羅)

- ①「一切(諸法)」は平等性の故に、般若波羅蜜多は平等性である。金剛部の大曼荼羅
- ②「一切(諸法)」は義利性の故に、般若波羅蜜多は義利性である。宝部の大曼荼羅
- ③「一切(諸法)」は法性の故に、般若波羅蜜多は法性である。蓮華部の大曼荼羅
- ④「一切(諸法)」は事業性の故に、般若波羅蜜多は事業性である。羯磨部の大曼荼羅

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 一切平等建立如来 復説一切法三摩耶最勝出生般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、一切(諸法)の(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)であることを建立した如来はまた、一切(諸法)の(象徴である四種の)曼荼羅の最勝を出生する般若の理趣を説いた。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

atha bhagavān sarvadharmā=samātā=pratiṣṭhitas tathāgataḥ punar api=imaṃ
sarva=dharmā=agryaṃ nāma prajñāpāramitā=nayaṃ deṣayāṃ āsa

(同私訳)

時に、世尊、「一切(諸法)」が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)を本性とすることを「建立」した如来はまた、この「一切(諸法)」の最勝と名づけられる般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

※「(一切法)三摩耶 samaya」:「ロイマン本」には「三摩耶」に該当する語がない。ここは、宮坂・松長両博士に従い「一切(諸法)」の(象徴である四種の)曼荼羅」とした。

《釈義》

(不空訳)

所謂 一切平等性故般若波羅蜜多平等性 一切義利性故般若波羅蜜多義利性
一切法性故般若波羅蜜多法性 一切事業性故般若波羅蜜多事業性 應知

(同私訳)

一切(諸法)は平等(生仏不二)を本性とする故に、般若波羅蜜多も平等(生仏不二)を本性とする(金剛部の曼荼羅)。

一切(諸法)は「利益」を本性とする故に、般若波羅蜜多も「利益」を本性とする(宝部の曼荼羅)。

一切(諸法)は「法性」であるが故に、般若波羅蜜多も「法性」である(蓮華部の曼荼羅)。

一切(諸法)は「利他行」を本性とする故に、般若波羅蜜多も「利他行」を本性とする(羯磨部の曼荼羅)、とまさに知るべきである。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

sarva=samatayā prajñāpāramitā=samātā sarva=arthatayā prajñāpāramitā=arthatā
sarva=dharmatayā prajñāpāramitā=dharmatā sarva=karmatayā prajñāpāramitā=karmatā
veditavya iti hrī

(同私訳)

「一切(諸法)」が(衆生と仏ともに)平等(生仏不二)を本性とするによって、般若波羅蜜多も平等(生仏不二)を本性とする(「金剛部」の「曼荼羅」)。

「一切(諸法)」が「利益」を本性とするによって、般若波羅蜜多も「利益」を本性とする(「宝部」の「曼荼羅」)。

「一切(諸法)」が「法性」であるによって、般若波羅蜜多も「法性」である(「蓮華部」の「曼荼羅」)。

「一切(諸法)」が「利他行」を本性とするによって、般若波羅蜜多も「利他行」を本性とする(「羯磨部」の「曼荼羅」)、と知られるべきである。フリー

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時金剛手 入一切如来菩薩三摩耶加持三摩地 説一切不空三摩耶心 吽

(同私訳)

時に、金剛手は、一切の如来・菩薩の曼荼羅(三摩耶)を加持する三摩地に入り、一切の利益をもたらすこと(不空)を「本誓」(三摩耶)とする心真言を説いた。吽(うーん)

(苦米地本)なし。

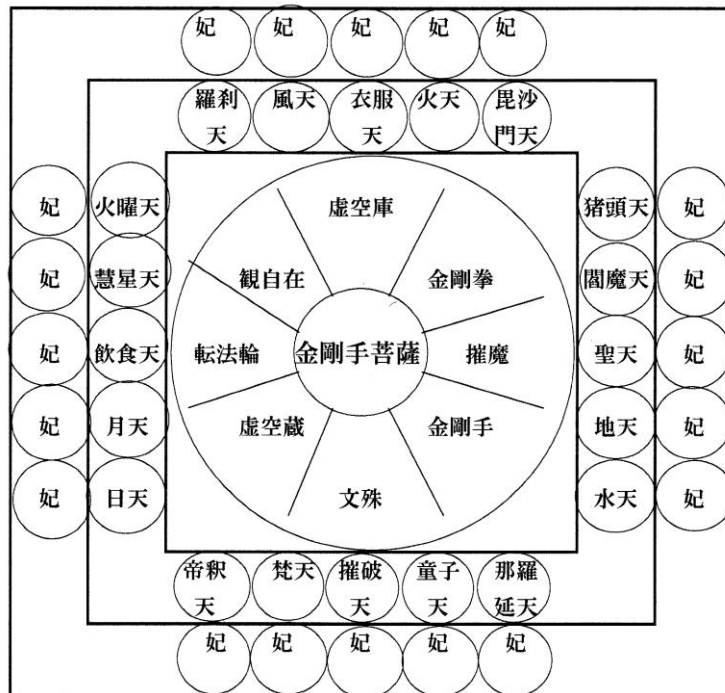
※ロイマン本にもない。

※「吽 hūṃ: 普賢菩薩の種字。『理趣釈』では、吽字の義、初品に釈する所の如し。

※「(一切如来菩薩)三摩耶 samaya」:この「三摩耶 samaya」は、上記と同じように、「(一切の如来・菩薩の)「曼荼羅」(を加持する)」とした。

※「(一切不空)三摩耶 samaya」:この「三摩耶 samaya」は、「本誓(とする)」とした。

※『理趣釈』による「降三世教令輪曼荼羅」



降三世教令輪曼荼羅(第十一)

●第十二段「外金剛会品」(外金剛部章、有情加持の法門)

大日如来が「外金剛部」諸尊のサトリの境地を説く。すなわち、「外金剛部」に配されているヒンドゥーの神々(仏教に帰依した「護法善神」)にも仏性があるという「道理」が、一切の「有情」の「四種蔵」性によって説かれる。

〔四種蔵〕(「四智」と「四波羅蜜」)

- ①一切の「有情」は如来(の本性を)蔵(している)。大円鏡智、金剛波羅蜜菩薩。
- ②一切の「有情」は金剛(のように堅固な「菩提心」を)蔵(している)。平等性智、宝波羅蜜菩薩。
- ③一切の「有情」は妙法(正しい「教法」を)蔵(している)。妙観察智、法波羅蜜菩薩。
- ④一切の「有情」は羯磨(大悲の「利他行」を)蔵(している)。成所作智、羯磨波羅蜜菩薩。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵如来 復説一切有情加持般若理趣

(同私訳)

時に、世尊は、また一切の衆生を加持する般若の理趣を説いた。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

atha bhagavān tathāgato vairocanaḥ punar api sarvasattva=adhiṣṭhānaṃ nāma prajñāpāramitā-nayaṃ deśayām āsa

(同私訳)

時に、世尊、「毘盧遮那如来」は、また、一切の「有情」の「加持」と名づけられる般若波羅蜜多の「道理」を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 一切有情如来蔵以普賢菩薩一切我故 一切有情金剛蔵以金剛蔵灌頂故
一切有情妙法蔵能轉一切母語言故 一切有情羯磨蔵能作所作性相應故

(同私訳)

- 一切の有情は如来蔵である。普賢菩薩の一切の我を以ての故に。
- 一切の有情は金剛 蔵である。金剛蔵の灌頂を以ての故に。
- 一切の有情)妙法蔵である。能く一切の母なる語言を轉ずるが故に。
- 一切の有情は羯磨蔵である。能く所作の性と相応するが故に。

(苦米地本)なし。

(ロイマン本)

sarvasattvās tathāgata=garbhāḥ samanta=bhadra=mahā=bodhisattva=sarva=ātmatayā
vajra=garbhāḥ sarvasattvā vajra=garbha=abhiṣīktatayā dharma=garbhāḥ
sarvasattvāḥ sarva=vāk=pravartanatayā karma=garbhāḥ sarvasattvāḥ sarvasattva=karaṇatā=
prayogatayā=iti trī

(同私訳)

- 一切の「有情」は如来蔵である。普賢大菩薩の一切の如来性(「我性」)によって。
- 一切の「有情」は「金剛」蔵である。「金剛」蔵の「灌頂」の本性によって。
- 一切の「有情」は法蔵である。一切の語言を轉ずる本性によって。
- 一切の「有情」は「羯磨」蔵である。一切の衆生の活動(=「事業」)性と相応する本性によって。

トリー

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

時外金剛部 欲重顯明此義故 作歡喜聲 說金剛自在自眞實心 怛唎二合

(同私訳)

時に、外金剛部は、重ねてこの意味を明らかにせんとして、歡喜の声を出し、金剛自在のおのずから眞實の心眞言を説いた。怛唎(とり、ちり)

(苦米地本)

tatra mahā=vajreśvara idaṃ tattva=hr̥dayam agāt oṃ vajra=netrībhyaḥ svāhā //

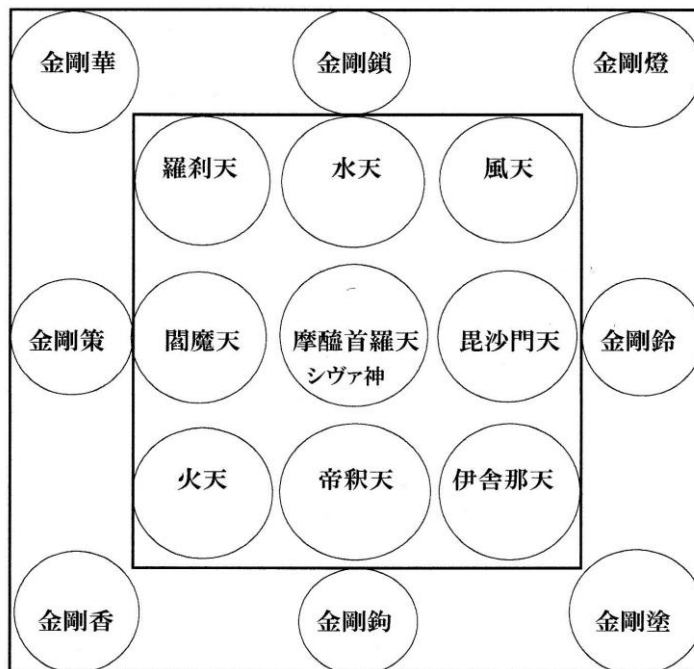
(同私訳)

ここで、偉大な「金剛」の「自在天」は、この(それ自体)眞實の「心眞言」を説いた。オーム、「金剛」のように堅固な眼に、スヴァーハー(幸いあれ)。

※「怛唎二合 𑖀𑖩」:外金剛部の種字。

『理趣釈』では、怛字は眞如の義。眞如に七種あり。唎字は塵垢の義なり。塵垢とは五蓋の義にして、よく眞如を蓋覆す。

※『理趣釈』による「外金剛会曼荼羅」



外金剛会曼荼羅(第十二段)

●第十三段 「七母女天集会品」(七母女天章、諸母天の法門)

「七母女天」が、一切衆生を、引き寄せ(「鉤召」)、(曼荼羅に)引入し(「摂入」)、(煩惱を)よく殺し(「能殺」)、サトリを得させること(「能成」)の「四摂法」を説く。

「サプタ・マートリカー」と言われるヒンドゥーの女神軍団の「七母神」が、仏教の「護法善神」に変身するパターンを、古代のインドで悪鬼が獲物をつかまえる方法をメタファーに。外道の者を

仏道に導き入れる化導の方法として説く。

〔四摂法〕

- ①「鈎召」=勸誘→布施
- ②「摂入」=導入→愛語
- ③「能殺」=(煩惱を)殺傷→利行
- ④「能成」=成就→同事

《(本誓の) (心) 真言》

(不空訳)

爾時七母天 頂禮佛足 獻鈎召攝入 能殺能成三摩耶眞實心 毘欲二合

(同私訳)

その時、七母女天は仏の足に頂礼して、(金剛鈎印で、一切の衆生を)鈎召し、(曼荼羅に)攝入し、(諸魔を)よく殺し、よく(サトリを)成就することを「本誓」とする(それ自体が)眞実の「心眞言」を(仏=大日如来に)献じた。毘欲(びよー)

(苦米地本)なし。

※ロイマン本にもない。

※「七母女天」:「梵天妃(梵天母) brahmi」「嬌吠哩(俱吠羅天母) kauveri」「嬌麼哩(童子天母) kaumāri」「勞捺哩(暴惡天母) raudri」「左閻拏(閻魔天母) yāmi, cāmuṇḍā」「吠瑟拏微(毘紐天母) vaiṣṇavi」「印捺哩(帝釈天母) aindri」といった女神たちで、敵対する者をことごとく滅ぼす「サプタ・マートリカー」と言われるインド神話最強の女神軍団。

※「毘欲 bhyo」:「七母女天」の種字。

『理趣釈』では、毘字は一切法の三有不可得、欲字は一切乗不可得なり。

※『理趣釈』による「七母女天曼荼羅」



七母女天集会曼荼羅(第十三段)

●第十四段 「三兄弟集会品」(三兄弟章、三兄弟の法門)

「三兄弟天」(ヒンドゥーの「梵天」・「摩醯首羅(大自在)天」・「那羅延天」)が自らの「心真言 svā」を説いて大日如来に献じ、その「心真言 svā」が「三兄弟天」のサトリ(「一切(諸)法」は「平等」・「超言語」・「虚空」)であることを説く。

〔薩嚩二合(さば一)svā〕:「svā」を三つに分け「sa」「vā」「a」とする。

「sa」=「satya」(真実)=一切(諸)法の「平等」=金剛薩埵=「梵天」。

「vā」=「vāc」(言語)=「超言説」=虚空蔵=「那羅延天」。

「a」=「akāśa」(虚空)=「如虚空」=観自在=「摩醯首羅(大自在)天」。

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

爾時末度迦羅天三兄弟等 親禮佛足 獻自心真言 薩嚩二合

(同私訳)

その時、末度迦羅天の三兄弟等が、親しく仏の足に頂礼し、自らの心真言を献じた。

薩嚩二合(さば一)。

(苦米地本)なし。

※ロイマン本にもない。

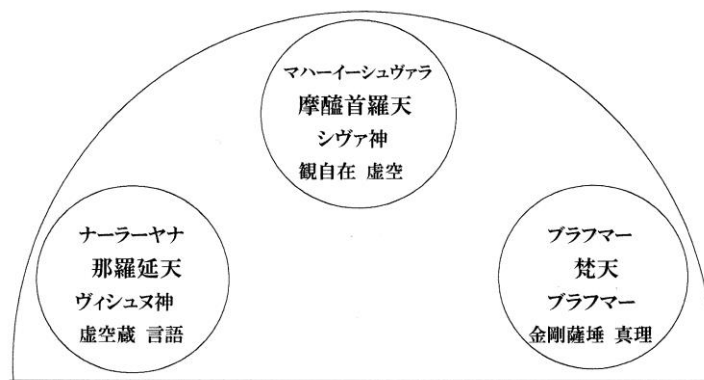
※「末度迦羅天 madhu-kara」:原意は蜜をつくる者=蜜蜂、「梵天(ブラフマー) brahmā」の異名。

※「三兄弟」:「梵天 brahmā」、「那羅延天 nārāyaṇa=ヴィシュヌ神 viṣṇu」、「摩醯首羅(大自在)天 maheśvara=シヴァ神 śiva」で、ヒンドゥーの神々を代表する三大神。「トウリ・ムールティー」(「三神一体」)でも知られ、「創造」「維持」「破壊」の神とされている。

※「薩嚩 svā」:「三兄弟」の種字。

『理趣釈』では、薩嚩字とは、薩字はすなわち一切法の平等なること虚空の如し。嚩字は一切法の言説は不可得なり。

※『理趣釈』による「三兄弟集会曼荼羅」



三兄弟集会曼荼羅(第十四段)

●第十五段 四姉妹集会品(四姉妹章、四姉妹の法門)

「四姉妹天」が、自らの「心真言 ham」を説いて大日如来に献じ、「四姉妹天」(「惹耶」)・「微惹耶」・「阿耳(爾)多」・「阿波羅爾多」のサトリ(「四波羅蜜菩薩」と相応の仏徳=「常」(常住不変)・

「楽」(離苦安楽)・「我」(自在無障)・「浄」(無垢清浄)を説く。

〔四波羅蜜〕

- ①「常」:サトリの境地は、永遠に常住不変である。「惹耶(ジャヤー)jayā」
- ②「楽」:サトリの境地は、世間の苦を離れ絶対的な安楽である。「微惹耶(ヴィジャヤー)vijayā」
- ③「我」:サトリの境地は、自分本位の自我を離れ仏性を自我とする。「阿耳多」(アジター)ajitā」
- ④「浄」:サトリの境地は、煩惱を離れ清浄である。「阿波羅爾多」(アパラージター)aparājitā」

《(本誓の)(心)真言》

(不空訳)

爾時四姉妹女天 獻自心真言 哈

(同私訳)

その時、四姉妹女天は自ら心真言を献じた。哈(かん)

(苦米地本)

tatra mahā=vajreśvara idaṃ tattva=hr̥dayam agāt oṃ vajra=netribhyaḥ svāhā //

(同私訳)

ここで、偉大な「金剛」の「自在天」は、この真実の「心真言」を説いた。

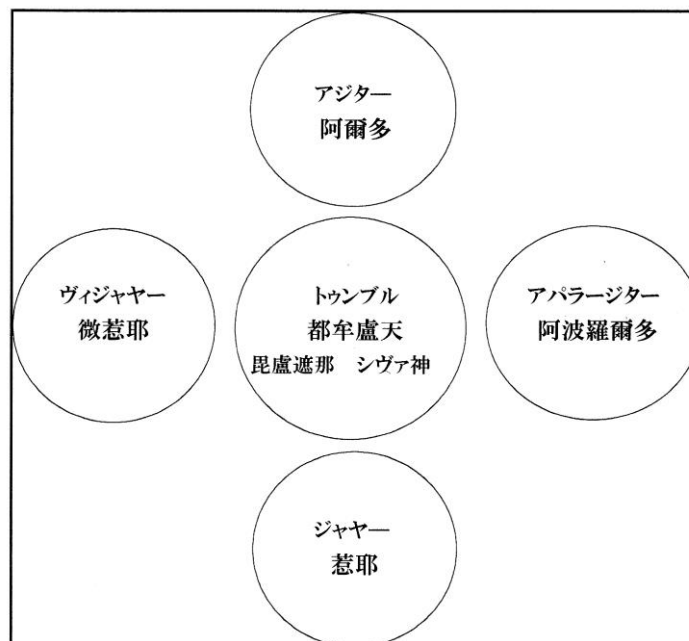
オーム、「金剛」なる眼に、スヴァーハー(幸いあれ)。

※「四姉妹」:「惹耶(ジャヤー)jayā」、「微惹耶(ヴィジャヤー)vijayā」、「阿耳多(アジター)ajitā」、「阿波羅爾多(アパラージター)aparājitā」。

※「哈 haṃ」:「四姉妹女天」の種字。

『理趣釈』では、哈字真言とは、一切法の因不可得にして、其の真言中に莽字を帶し、一切法の不可得を詮す。

※『理趣釈』による「四姉妹集会曼荼羅」



四姉妹集会曼荼羅(第十五段)

●第十六段「五部具会品」(四波羅蜜部中大曼荼羅章、各具の法門)

大日如来が「無量無邊究竟如来」の姿となって、般若波羅蜜多(サトリの智慧)の特性を「無量」・「無邊」・「一性」・「究竟」であると説く。四波羅蜜とは、ここでは金剛・宝・蓮華・羯磨の「四部」。大曼荼羅とは、「四部」の曼荼羅にそれぞれ「五部」の曼荼羅を具す「五部具会曼荼羅」のこと。

※宗祖大師(『真実経文句』)はこれを、次のように言う。

- 金剛部の中の曼荼羅にみな五部を具し、一一の聖衆に無量の曼荼羅を具し、四印等もまた無量なることを顕わす。
- 宝部の中に五部の曼荼羅を具し、四印等もまた無量なることを顕わす。
- 蓮華部の中に五部の曼荼羅を具し、四印等もま同一清浄法界の性なることを顕わす。
- 羯磨部の中に五部の曼荼羅を具し四印等も究竟無住涅槃に到ることを顕わす。

[四種性]

- ①「無量」:般若波羅蜜多は無量の故に、(金剛部の)一切如来は無量である。
- ②「無邊」:般若波羅蜜多は無邊の故に、(宝部の)一切如来は無邊である。
- ③「一性」:(蓮華部の)一切(諸)法は同一性の故に、般若波羅蜜多は同一性である。
- ④「究竟」:(羯磨部の)一切(諸)法は究極の故に、般若波羅蜜多は究極である。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 無量無邊究竟如来 為欲加持此教令究竟圓滿故 復説平等金剛出生般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、無量無邊の究極の如来は、この教令を加持し究極まで円満せんがための故にまた、平等(生仏不二)の金剛(のような堅固な菩提心)を出生する般若の理趣を説いた。

(苦米地本)

atha bhagavān ananta=aparyanta=niṣṭhas tathāgato ‘paryanta=niṣṭha=dharmā punar api asya=kalpasya pariniṣṭha=adhiṣṭhāna=artham imaṃ sarvadharma=samatā=pariniṣṭha=adhiṣṭhāna=vajraṃ nāma prajñāpāramitā=naya=artham abhāṣata

(同私訳)

時に 世尊、無量無邊に極った究極の「如来」は、「一切(諸)法」が無邊に極まったものであり、また、この(第十五段までの)聖訓の究極までの「加持」のために、この「一切(諸)法」の平等(生仏不二)によって「加持」された究極の「金剛」(のような堅固なサトリ)と名づけられた般若波羅蜜多の「道理」の意義を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 般若波羅蜜多無量故一切如来無量 般若波羅蜜多無邊故一切如来無邊
一切法一性故般若波羅蜜多一性 一切法究竟故般若波羅蜜多究竟

(同私訳)

いわゆる、般若波羅蜜多は(多大)無量の故に、一切如来は無量である。
般若波羅蜜多は(広大)無邊の故に、一切如来は無邊である。
一切の(諸)法は同一(清浄法界)性の故に、般若波羅蜜多は同一(清浄法界)性である。
一切の(諸)法は究極(究竟)の故に、般若波羅蜜多は究竟である。

(苦米地本)

prajñāpāramitā=anantatayā sarvatathāgata=anantatā /
prajñāpāramitā=aparyantatayā sarvadharma=aparyantatā /
prajñāpāramitā=ekatayā sarvadharma=ekatā prajñāpāramitā=pariniṣṭhatayā sarvadharma=
pariniṣṭhatatā bhavati //

vajra om sarvadharmatā=aprapaṅco hili
sarovadharmitā mili
sarva=anurāgiṇi svāhā //

(同私訳)

般若波羅蜜多は(多大)無量であるによって、(金剛部の)「一切如来」は無量である。
般若波羅蜜多は(広大)無辺であるによって、(宝部の)「一切(諸)法」は無辺である。
般若波羅蜜多は同一(清浄法界)性であるによって、(蓮華部の)「一切(諸)法」は同一(清浄法界)性である。
般若波羅蜜多は究極であるによって、(羯磨部の)「一切(諸)法」は究極である。

金剛(手)よ、オーム。一切の「法性」は「無戲論」である。
一切の「法性」よ、一切の世俗よ、幸いあれ。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此理趣受持讀誦思惟其義 彼於佛菩薩行皆得究竟

(同私訳)

金剛手よ、もしこの理趣を聞いて受持し、讀誦し、その意味を思惟する人あらば、彼は仏・菩薩の行いにおいて皆究極(究竟)を得るであろう。

(苦米地本)

yaḥ kaścīd vajra=pāṇe imaṃ dharma=pariyāyaṃ śroṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyati uddeṣyati
pravartayiṣyati bhāvayiṣyati tasya=aniṣṭhāṃ Buddha=bodhisattvacaryāṃ gatvā sarva=āvaraṇa=
pariniṣṭhatayā tathāgatatvaṃ vajra=dharatvaṃ vāsu bhaviṣyati //
namaḥ sarvatathāgatānāṃ namaḥ sarvavajra=dharānām /
om bhagavann ārāt pāraṃ viśodhaya svāhā //
om kāra=pūrvaṅgamād ogha=uttārāṇaṃ kariṣyāmi sarvasattvānām //

(同私訳)

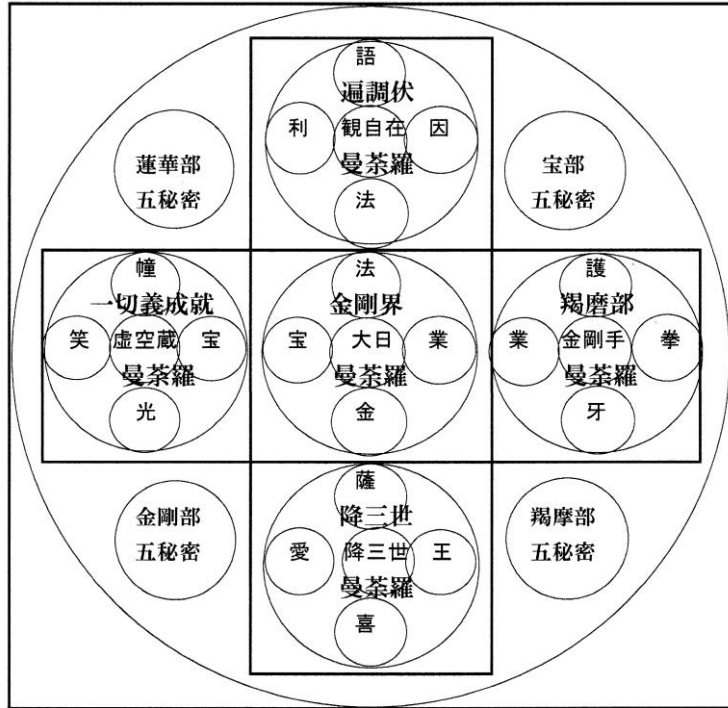
「金剛手」よ、誰であるかを問わず、この「法門」を聞き、受持し、讀誦し、儀式を行い、転じさせ、修習する人あらば、その極まりなき仏・菩薩行を行い、一切の障礙を畢竟じて、速やかに如来性あるいは「執金剛」性になるであろう。

「一切如来」に帰命します。一切の「執金剛」に帰命します。

オーム。「世尊」よ、直ちに、彼岸を清めたまえ、幸いあれ。

オーム。行動を先とし、私は一切の「衆生」の(煩惱の)大海を渡(り彼岸に到らせ)ることを行います。

※『理趣釈』による「五部具会曼荼羅」



五部具会曼荼羅 (第十六段)

●第十七段 五秘密品(五種秘密三摩地章、深秘の法門)

大日如来が「得一切秘密法性無戲論如来」の三摩地に入り、第十五段までの「般若理趣」を総括して、「大愆」・「大樂」・「大菩提」・「摧大力魔」・「遍三界自在主」の「五秘密」によって、私たちの現実世界は「一切(諸)法」が「清浄」なものであり、そのまま如来の「法性」の世界であること、すなわち煩惱は「菩提心」に転じ、生死は「涅槃」に転じ、それがこの『理趣経』が言う「金剛薩埵」の「心位」(境地、立ち位置)であり、つまり般若波羅蜜多の密教的「理趣」であることを説く。

[五秘密] (「五秘密尊」の三摩地 = 「十七清浄句」のはじめの五句)

- ①「大愆」: 煩惱による欲望ではなく、「菩提心」に基づく衆生を済度せずにはいられない「清浄」な慈悲愛護の意欲。「欲金剛菩薩」。
- ②「大樂」: 煩惱による快樂ではなく、「清浄」な慈悲愛護にもとづく菩薩の境地での絶対的な「安樂」。「触金剛菩薩」。
- ③「大菩提」: 「一切如来」のサトリ(=「五智」)。「金剛薩埵」。
- ④「摧大力魔」: 仏法に従わない「邪魔外道」を「忿怒」(=慈悲)行によって「摧伏」「調伏」する降魔の力。「愛金剛菩薩」。
- ⑤「遍三界自在主」: 「欲界」(本能的欲望)・「色界」(モノ・コトへの執著)・「無色界」(意識作用による執著)の「三界」すべてを「調伏」した自由自在の境地。「慢金剛菩薩」。

※宗祖大師(『真実経文句』)は、「五秘密」尊を「明妃」とする。

《標章》

(不空訳)

時薄伽梵 毘盧遮那 得一切秘密法性無戲論如来 復説最勝無初中後大樂金剛不空三摩耶

金剛法性般若理趣

(同私訳)

時に、世尊、毘盧遮那(如来)、一切(如来)の秘密の法性を得て無戲論の如来は、また最勝にして、初めも中間も後もない、絶対的な安樂が金剛(のように堅固)であり、空理ではない、平等撰持(三摩耶)の、金剛(のように堅固な)の法性という般若の理趣を説いた。

(苔米地本)

atha bhagavān vairocanaḥ tathāgatas sarvatathāgata=guhya=dharmatā=prāptaḥ sarvadharmā=aprapañcaḥ punar api=idaṃ mahāsukha=vajra=amogha=samayaṃ nāma vajra=dharma=samatā=prajñāpāramitā=naya=mukhaṃ parama=ādyam anādi=nidhanam atyuttamam abhāṣata

(同私訳)

時に、世尊、「毘盧遮那」、「一切如来」の秘密の「法性」を得た、「一切(諸)法」に「戲論」なき如来はまた、絶対的な「安樂」が「金剛」(のように堅固なサトリ)であり、空理ではない、平等撰持(三摩耶)と名づけられる、最勝の、本初にして、無始無終の、「金剛」(のように堅固な)教法の平等(生仏不二)という般若波羅蜜多の「道理」の「(法)門」を説いた。

《釈義》

(不空訳)

所謂 菩薩摩訶薩大慾最勝成就故 得大樂最勝成就
菩薩摩訶薩得大樂最勝成就故 則得一切如来大菩提最勝成就
菩薩摩訶薩得一切如来大菩提最勝成就故 則得一切如来摧大力魔最勝成就
菩薩摩訶薩得一切如来摧大力魔最勝成就故 則得遍三界自在主成就
菩薩摩訶薩得遍三界自在主成就故 則得淨除無餘界一切有情住著流轉
以大精進 常處生死救攝一切 利益安樂最勝究竟皆悉成就

(同私訳)

いわゆる、菩薩摩訶薩は大慾の最勝を成就するの故に、大樂の最勝なる成就を得る。
菩薩摩訶薩は絶対的な安樂の最勝成就を得るの故に、則ち一切如来の大菩提の最勝なる成就を得る。
菩薩摩訶薩は一切如来の大菩提の最勝成就を得るの故に、則ち一切如来の大力の魔を摧く最勝の成就を得る。
菩薩摩訶薩は一切如来の大力の魔を摧く最勝成就を得るの故に、則ち遍く三界において自在な主たるの成就を得る。
菩薩摩訶薩は遍く三界において自在な主たるの成就を得るの故に、則ち無余界の一切の衆生を淨め除いて、生々流転に住して(それに)染著し、大精進を以て常に生死に処し、一切(の衆生)を救済し利益し安樂の最勝の究極を皆悉く成就することを得る。

(苔米地本)

mahā=rāga=uttama=siddhir mahā=bodhisattvānāṃ mahā=sukha=uttama=siddhyai saṃvartate /
mahā=sukha=uttama=siddhir mahā=bodhisattvānāṃ sarvatathāgata=mahābodhi=uttama=siddhyai saṃvartate /
sarvatathāgata=mahā=bodhi=uttama=siddhir mahā=bodhisattvānāṃ sarva=mahāmāra=pramardana=uttama=siddhyai saṃvartate /
sarva=mahā=māra=pramardana=uttama=siddhir mahā=bodhisattvānāṃ sarva=traidhātuka=adhipati=uttama=siddhyai saṃvartate /
sakala=traidhātuka=iśvarya=uttama=siddhir mahā=bodhisattvānāṃ aśeṣa=anavaśeṣa=sattva=dhātu=viśodhana=adhyavasāya=hetu=arthena=iti ā saṃsāra=adhyavasāyināṃ

mahā-vīryāṇām mahāsattvānām aśeṣa-anavaśeṣa-sattva-dhātu-paritrāṇa-sarva-hita-
sukha-uttama-siddhyai saṃvartate //
oṃ vajra / oṃ sarvatathāgata-māte / mahā-sukha-dhāraṇi /
sarva-samatā-praveśani / sarva-duḥkha-kṣayaṅkari / sarva-sukha-pradāyike / sarva-sukha-
radāyini svāhā //

(同私訳)

絶対的な「慾」(「大慾」)の最勝なる成就是、偉大な菩薩たちに、絶対的な「安楽」(「大楽」)の最勝の成就を得せしむ。

絶対的な「安楽」(「大楽」)の最勝なる成就是、偉大な菩薩たちに、「一切如来」の大菩提の最勝の成就を得せしむ。

「一切如来」の菩提の最勝なる成就是、偉大な菩薩たちに、一切の「大(力)魔」の「摧伏」の最勝の成就を得せしむ。

一切の「大(力)魔」の「摧伏」の最勝なる成就是、偉大な菩薩たちに、一切の「三界」(自在)主の最勝の成就を得せしむ。

一切の「三界」自在主の最勝なる成就是、偉大な菩薩たちの、余すことなく尽きることなき衆生界を浄め(そこに)染著する因義のためであり、輪廻の支配下にある、偉大で勇猛な大薩埵に、余すことなく尽きることなき衆生界を済度し一切を「利益」する「安楽」の最勝の成就を得せしむ。

オーム、「金剛(薩埵)」よ、オーム、「一切如来」の母よ、

絶対的な「安楽」(「大楽」)を持する者よ、

一切の平等性に入る者よ、一切の苦を除く者よ、

一切の「安楽」を与える者よ、一切の「安楽」を与える者よ、幸いあれ。

《撰頌》

【百字偈】

(不空訳)

何以故

菩薩勝慧者 乃至盡生死 恒作衆生利 而不趣涅槃
般若及方便 智度悉加持 諸法及諸有 一切皆清淨
慾等調世間 令得清淨故 有頂及惡趣 調伏盡諸有
如蓮體本染 不為垢所染 諸慾性亦然 不染利群生
大慾得清淨 大安樂富饒 三界得自在 能作堅固利

(同私訳)

何を以ての故に(何故か)。

菩薩という勝れた智慧もつ者は、乃至生死を尽くすまで、常恒に衆生の利益(利他行)を行い、そして涅槃には趣かない。

般若及び方便の智慧により(衆生を)救済して悉く加持し、諸法(一切の法)と諸有(一切の有情)をすべて清浄にする。

慾など、世間(の垢)を調伏し、清浄ならしめ、有頂天から(地獄などの)悪趣まで、悉く諸有(一切の有情)を調伏する。

蓮花がもともとの色に染まっっていて、垢れの染めるところとならないが如く、諸慾の本性も然りで、(垢れに)染まることなく生あるものを利益する。

絶対的な慾が清浄を得て、絶対的な安楽と富饒が、三界において自在を得、よく堅固な利行を行うのである。

(苦米地本)

tat kasya hetoḥ
yāvat saṃsāra=vāsa=sthā bhavanti vara=sūrayaḥ /
tāvat sattva=artham atulaṃ śaktāḥ kartum anirvṛtāḥ //

prajñāpāramitā=upāya=jñāna=adhiṣṭhāna vāsitāḥ /
sarvadharmā=viśuddhyā tu bhava=śuddhā bhavanti ha //

rāga=ādi=vinayo loka ā bhavāt pāpakṛt sadā /
teṣāṃ viśodhana=artham tu vinayanti ā bhavāt svayam //

yathā padmaṃ surakṛtāṃ tu rāga=doṣair na lipyate /
vāsa=doṣair bhava nityam na lipyante jagad=dhitāḥ //

mahā=rāga=viśuddhās tu mahā=saukhyā mahā=dhanāḥ /
tridhātviśvaratāṃ prāptāḥ sattva=artham kurvate dṛḍham //

(同私訳)

それは、何の因によってか(何故か)。

すぐれた賢者(菩薩)たちは、「輪廻」の住処にとどまる間、その間は、「有情」(我執に生きる私たち人間、「三界」をさまよう煩悩具足の私たち人間)への無比の利益を行うことができ、涅槃には入らない。

(彼ら賢者(菩薩)たちは)般若波羅蜜多と方便の(不二同一という)智慧による加持に住し、而して「一切諸法」の清浄なるによって、「有」(我執のステージ・「有情」がさまよう世界・「三界」・「世間」)も清浄ならしめる。

(彼ら賢者(菩薩)たちは)世間において、常に、「有」の際(「有頂天」・「非想非非想処」)まで、一度に、欲等を調伏し、かつそれら(欲等)の浄化のために、「有」の際まで、自ら進んで、調伏する。

紅蓮華が(もともと)深紅であり、かつ、欲の罪過によって垢染されないように、「有」において、居処(世間)の罪過によっても、変わらずに、世間利益は垢染されない。

絶対的な「欲」(「大欲」)は(自性)清浄であり、かつ絶対的な「安楽」(「大楽」)は大いなる富財である。(彼ら賢者たちは)「三界」の自在主であることを得て、「有情」の利益を堅固に為すべし。以上(「慢金剛菩薩」の三摩地、行大精進、羯磨部)。

《歎徳》

(不空訳)

金剛手 若有聞此本初般若理趣日日晨朝或誦或聽 彼獲一切安樂悅意大樂金剛不空三昧
究竟悉地 現世獲得一切法自在悅樂 以十六大菩薩生得於如來執金剛位 吽

(同私訳)

金剛手よ、もしこの本初の般若の理趣を聞き、日々の晨朝に或いは誦し或いは聴く人あらば、彼は一切の安楽と悦びと、絶対的な安楽が金剛(のように堅固)であり利益をもたらす平等撰

持の究極の成就を獲得し、現世において一切の(諸)法の自在と悦樂を獲得し、十六大菩薩の出生を以て、(毘盧遮那)如来なる金剛(杵)を持つ者としての位を得るだろう。

吽(うーん)

(苦米地本)

yaḥ kaścīd vajra-pāṇe imaṃ parama-ādyam prajñāpāramitā-naya-mukhaṃ
dharma-paryāyam dine dine kālyam utthāya-uccārayiṣyati śroṣyati vā sa sarva-
sukha-saumanasya-lābhī mahā-sukha-vajra-amogha-samaya-siddhim ātyantikīm
iha=eva janmaṇi lapsyate / sarvatathāgata=vajra-guhya-uttama-siddhir mahā-vajra-
dharo bhaviṣyati tathāgato vā iti //

(同私訳)

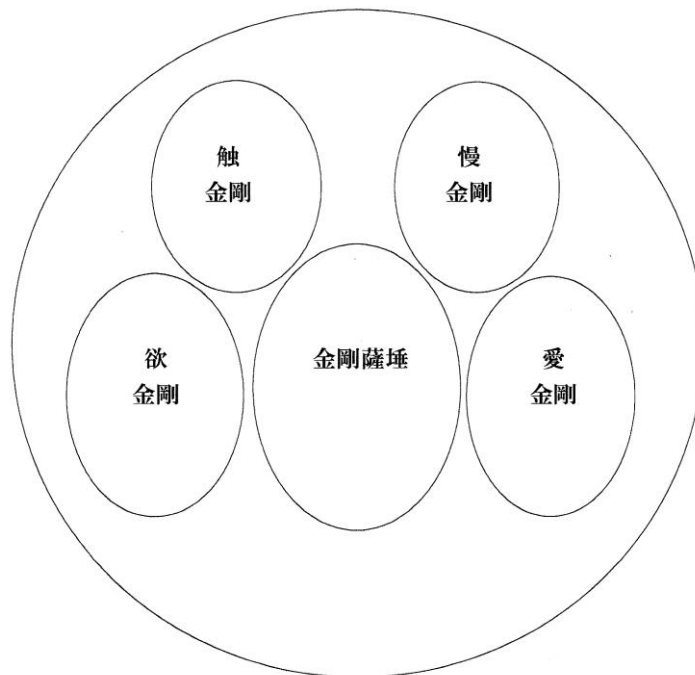
「金剛手」よ、誰であるかを問わず、この本初の般若波羅蜜多の「道理」の門たる「法門」を、日々、朝に、努力して読誦し、あるいは聞く人は、彼は一切の「安樂」の悦樂を得、絶対的な「安樂」(「大樂」)が「金剛」(のように堅固)であり、利益をもたらす、平等撰持の成就是究竟となり、ここにおいて実に、「十六大菩薩」の出生が説かれる。あるいはまた、「一切如来」の「金剛」(のように堅固な)秘密の最勝の成就是、絶対的な「金剛」(のような堅固さ)を持する(「執金剛」)の如来たらしめるであろう。

※「吽 hūṃ」: 前述。

※「(大樂金剛不空)三摩耶 samaya」: ここは、「絶対的な安樂が、金剛の(ように堅固な菩提心)であり、空理ではない(サトリの)」「教え」とした。

※「(大樂金剛不空)三昧 samaya」: この「三昧」は苦米地本では「samaya」となっている。ここは、「絶対的な「安樂」が「金剛」(のように堅固)であり空理ではない「平等撰持」とした。

※『理趣釈』による「五秘密曼荼羅」



五秘密曼荼羅(第十七段)



密 祕 五

<五秘密尊>
 触金剛 慢金剛
 欲金剛 金剛薩埵 愛金剛

IV 流通分

■流通分

《讚序》

(不空訳)

爾時一切如来及持金剛菩薩摩訶薩等皆來集會 欲令此法不空無礙速成就故 咸共稱讚金剛手言

(同私訳)

その時、一切如来や持金剛の菩薩などが皆来て集会し、この法をして利益あり、無礙にして速く成就せしめんとする故に みな共に金剛手を称讚して言う。

(菩提地本) 不空訳に相応せず

《撰讚》

(不空訳)

善哉善哉大薩埵 善哉善哉大安樂
 善哉善哉摩訶衍 善哉善哉大智慧
 善能演説此法教 金剛修多羅加持

持此最勝教王者 一切諸魔不能壞
得佛菩薩最勝位 於諸悉地當不久
一切如來及菩薩 共作如是勝說已
為令持者悉成就 皆大歡喜信受行

(同私訳)

善きかな、善きかな、すぐれて堅固なる菩薩(金剛薩埵)よ(金剛部)、
善きかな、善きかな、(世間の精神的身体的安樂を超えた)絶対的な安樂よ(宝部)、
善きかな、善きかな、大乘(『理趣經』の教法)よ(蓮華部)、
善きかな、善きかな、(大悲利他・自他平等の)すぐれた智慧よ(羯磨部)。
善きかな、能くこの(『理趣經』の)教説を説き、金剛の(ように堅固な)(密教)經典(金剛乘)を加持することよ(仏部)。
この最勝の教王(『理趣經』)を受持する者は、一切の諸魔・外道も破壊することはできず(金剛部)、
仏・菩薩の最勝の位(境地)を得て、諸々の成就に於いてまさに速やかである(宝部)。
一切如來及び菩薩は、共に、このように勝れた教法を説き終つて(蓮華部)、
(この『理趣經』)を受持する者を悉く成就せしめるために、皆(金剛手菩薩ほかの諸菩薩及び諸天衆)大いに歡喜し、信じ、受持し、行じる(実践する)のである((羯磨部))。
(苔米地本)なし。

《寸記》

●「五(智)如來」「五智」「五部」について

周知の通り、『般若理趣經』は「般若波羅蜜多」を説く「般若經」であると同時に、『金剛頂經』に属する密教經典である。それ故、『金剛頂經』の教義が色濃く反映されていて、その代表的なものが「五(智)如來」「五智」「五部」である。

○「五(智)如來」(=「五仏」)とは、

- ①大日如來：宇宙の真理そのものを現すとされる密教の絶対的な中心の本尊。その智慧の光明は除暗遍明であり、大光明が遍く一切処に及び、慈悲の活動が活発で不滅永遠であるところから、特に大を加えて「大日」と稱する(『密教辞典』佐和隆研ほか)。
- ②阿閼如來：大日如來の別徳として、本有の堅固な「菩提心」を仏徳とする。
- ③宝生如來：大日如來の別徳として、「菩提心」から福德の宝(如意宝珠)を生ずることを仏徳とする。
- ④阿彌陀如來：大日如來の別徳として、世間の衆生を正しく觀察し説法化導することを仏徳とする。
- ⑤不空成就如來：大日如來の別徳として、大悲の「利他行」による衆生済度が実りあることを仏徳とする。

○「五智」とは、

- ①「法界体性智」：「法界」とは、私たちが認識の対象とする生滅轉變をくり返すあらゆる現象態の世界。大乘はこれを「一切皆空」とし、華嚴は「事法界」「理法界」「事理法界」「事事法界」、あるいは「重々無尽」「真如」と言い、密教は地大・水大・火大・風大・空大(虚空)・識大(「六大」)を以てその体性とし、大日如來の象徴とする(「六大法身」)。この「法界」の根本の

智慧(大日如来の智慧)を「法界体性智」と言う。アンマラ識(第九識)が転じて智慧になったもの(「転識得智」)。

- ②「大円鏡智」:金剛智とも言い、きれいにみがかれて「一切(諸)法」を映す大きな円い鏡のように、清浄無垢で、一点のくもりもない、堅固な、サトリの智慧。唯識(ゆいしき)で言うアーラヤ識(第八識)が転じて智慧になったもの。
- ③「平等性智」:灌頂智(かんじょうち)とも言い、(サトリの境地では)「一切(諸)法」が「無自性」「空」であるから、自己も他者もなく無差別平等、衆生(生)と如来(仏)の別なく「生仏不二」であると見る智慧。唯識で言うマナ識(第七識)が転じて智慧になったもの。
- ④「妙観察智」:蓮華智(れんげち)・転法輪智(てんぼうりんち)とも言い、この娑婆世間で煩惱と迷妄に生きる衆生を正しく観察し、仏道に導き入れる説法(転法輪)の智慧。唯識で言う意識(第六識)が転じて智慧になったもの。
- ⑤「成所作智」:羯磨智(かつまち)とも言われ、大悲によって衆生済度の「利他行」を実践する智慧。唯識で言う前五識(眼識・耳識・鼻識・舌識・身識)が転じて智慧になったもの。

○「五部」とは、

- ①仏部(如来部):大日如来を主尊とする諸尊グループ。「法界体性智」のはたらきを担う。
- ②金剛部:阿閼如来を主尊とする諸尊グループ。「大円鏡智」のはたらきを担う。
- ③宝部:宝生如来を主尊とする諸尊グループ。「平等性智」のはたらきを担う。
- ④蓮華部:阿弥陀如来を主尊とする諸尊グループ。「妙観察智」のはたらきを担う。
- ⑤羯磨部:不空成就如来を主尊とする諸尊グループ。「成所作智」のはたらきを担う。

●各段の教主について

『理趣経』は十七段で構成されているが、周知のように、各段ごとに教主がいる。それを一覧にすると、

- 初段では、金剛手菩薩＝金剛薩埵。この金剛薩埵の三摩地に入った大日如来が「大楽の法門」を説く
- 第二段では、大日如来。大日如来が自ら、「証悟の法門」を説く。
- 第三段では、(調伏難調)釈迦牟尼如来。釈迦牟尼如来の三摩地に入った大日如来が降三世明王の姿になり、「降伏の法門」を説く。
- 第四段では、得自性清浄法性如来(阿弥陀如来＝観自在王如来→観自在菩薩)。阿弥陀如来の三摩地に入った大日如来が観自在菩薩の姿になり、「観照の法門」を説く。
- 第五段では、一切三界主如来(宝生如来→虚空蔵菩薩)。宝生如来の三摩地に入った大日如来が虚空蔵菩薩の姿になり、「富の法門」を説く。
- 第六段では、得一切如来智印如来(不空成就如来→金剛拳菩薩)。不空成就如来の三摩地に入った大日如来が金剛拳菩薩の姿になり、「実動の法門」を説く。
- 第七段では、一切無戲論如来(→文殊師利菩薩)。一切無戲論如来の三摩地に入った大日如来が文殊師利菩薩の姿になり、「字輪の法門」を説く。
- 第八段では、一切如来入大輪如来(→纒発心転法輪菩薩)。一切如来入大輪如来の三摩地に入った大日如来が纒発心転法輪菩薩の姿になり、「入大輪の法門」を説く。
- 第九段では、一切如来種種供養藏廣大儀式如来(→虚空庫菩薩)。一切如来種種供養藏廣大儀式如来の三摩地に入った大日如来が虚空庫菩薩の姿になり、「供養の法門」を説く。
- 第十段では、能調持智拳如来(→摧一切魔菩薩)。能調持智拳如来の三摩地に入った大日如来が摧一切魔菩薩の姿になり、「忿怒の法門」を説く。

- 第十一段では、一切平等建立如来(→金剛手菩薩(=普賢菩薩=金剛薩埵))。一切平等建立如来の三摩地に入った大日如来が金剛薩埵の姿になり、第二段～第十段をとりまとめた「普集の法門」を説く。
- 第十二段では、大日如来。大日如来が、一切の「有情」、とくに「外金剛部」護法神にも仏性があることを「有情加持の法門」として説く。
- 第十三段では、七母女天。七母女天が、「調伏」の境地である「諸母天の法門」として、自らの「心真言」を説く。
- 第十四段では、三兄弟。三兄弟天が、そのサトリの境地である「三兄弟の法門」として、自らの「心真言」を説く。
- 第十五段では、四姉妹天。四姉妹天が、そのサトリの境地である「四姉妹の法門」として、自らの「心真言」を説く。
- 第十六段では、無量無辺究竟如来(→大日如来)。無量無辺究竟如来の三摩地に入った大日如来が「各具の法門」を説く。
- 第十七段では、得一切秘密法性無戲論如来(→大日如来)。得一切秘密法性無戲論如来の三摩地に入った大日如来が「五秘密」すなわち「深秘の法門」を説く。

余談ながら、その姿を種々に変える大日如来について少々触れておくと、
先ず「自性身」「自受用身」「他受用身」「変化身」、あるいは「自性身」「受用身」「変化身」「等流身」の「四種法身」のことである。

- 「自性身」は、「法界」という宇宙的真理の世界を身体とし、「一切皆空」「縁起生」「法性」「法如」という真実態そのものの法身大日如来。
- 「受用身」は、「自受法楽」の故に説法する大日如来(自受用身・智法身)と、「十地」の菩薩のために説法する他受用身。
- 「変化身」は、「十地」前の菩薩・声聞・縁覚・凡夫のために変身して導く、応化の法身。
- 「等流身」は、「六道」輪廻にさまよう衆生を、それと等同の姿に変身して救済する法身。観世音菩薩が仏身から執金剛神まで三十三の姿に変身するのは、この「等流身」と同じである。

この変身する仏身観は、ヒンドゥーのヴィシュヌの化身(「アヴァターラ」)を思い起こさせる。ラーマやクリシュナなどとともに「釈迦 Buddha」も入っていたはずである。ヒンドゥー教徒のヴィシュヌ信仰では、「釈迦」は「ブッダデーヴァ Buddhadeva」、ヴィシュヌの化身なのである。「アヴァターラ」は昨今、自分の分身のキャラクター「アバター」として、チャットやゲームなどネットサービスに多く使われ、SF映画「アバター」(2009)では仮想の衛星「パンドラ」に住む原住民族ナヴィと地球人との人造生命体というものにもなった。

●「(一切諸)法(sarva) dharma」について

「一切諸法」の自性「清浄」をテーマとする『理趣経』にしばしば登場する「(一切諸)法(sarva) dharma」であるが、それを仏教研究者のほとんどが「存在」とか「存在するもの」、あるいは「モノゴト」「実在」のように和訳し、そう解釈し、「法 dharma」を「存在」と訳しておけば、あるいはそう解釈すればあたりさわりのない、といった根拠不明の定説が仏教研究の世界では一般化している。私もそれに右へ倣いし、「事物・事象」や「モノ・コト」などと和訳し、またそのように解釈し、お茶をにごしてきた。しかし今回、故あって

「(私たちが観想中に観ずる)観念の持続不変の基体とみなされるかたちや性質(属性)」

と言い換えることとした。

もう少し言えば、私たちが観想中、例えば「字輪観」の三摩地中、「観」の対象となる「五字」の基体とみなされるかたち(形象)や性質(字義)など=属性ということになるだろうか。あるいは、釈尊の「十二因縁」やアビダルマ(世親『俱舍論』)が言う「五位七十五法」や唯識(護法『成唯識論』)が言う「五位百法」の特徴や特性などで、「一切」とは、「五字」の「五」であり「十二因縁」の「十二」であり、「七十五法」の「七十五」であり「百法」の「百」のことを指す。すなわち、「(一切諸)法」とは「あらゆる存在」とか「すべての事物・事象」ではない、ということである。

この受けとめは、本宗を代表する学匠で思索家である廣澤隆之師の「和辻哲郎の仏教理解」(比較思想学会発表)やご助言、また本宗きっての優れた学究である宮坂宥洪師の「仏教におけるダルマ(法)の意味」(『現代密教』第22号、智山伝法院)に負っている。

それは、世親(『阿毘達磨俱舍論』)が言った「自相保持 svalakṣaṇa-dhāraṇa」や、これを玄奘が訳した「任持自性」や、普光が註釈した「能持自性」や、これをロシアの仏教学者、シチェルバツキー(シチェルバトスコイ)の愛弟子オットー・ローゼンベルグが解釈した「実体的持者」(「現象存在の特相を保持するもの」「現象存在の基体」「超越的で私たちに認識されないもの」)、それを和辻哲郎が龍樹(大乘中観派)の立場から「認識されないのでは「空」が成り立たない」と思想的な批判をしたこと(廣澤師も指摘)等々を踏まえ、宮坂師が「dharma」の言語的な原義やインド思潮・初期仏教やプラトンなどの広い視座から「瞑想のなかに顕現し、認識され、観ぜられるもの」「イデア的・理念的な存在」「保つものではなく保たれるもの」「日常的な机や本のような「事物」ではない」と断じられたご高見から得たものである。

周知のように、仏教を勉強する学究にとって、「法(ダルマ) dharma」という術語は多義であるため、解釈や和訳に苦勞する。

その語源を調べると、「√ dhr」(「把持する」「固持する」「保持する」「所有する」「存続する」、仏典では「受持」「憶持」「能任持」)であり、それから派生した形容詞「dhara・dhāraṇa, dhāra・dhāraṇa」(「持つ」「保持する」「保存する」「持続する」「所有する」、仏典では「任持」「受持」「奉持」「任持者」)があり(『梵和辞典』)、英語では「hold」「keep」「possess」「restrain」、「holding」「keeping」「maintaining」「mental concentration」といった意味が挙げられ(『SANSKRIT DICTIONARY』 MACDONELL)、「dharma」そのものには、「確定した秩序」「慣例」「風習」「法則」「規定」「義務」、「美德」「善行」「宗教」「教説」「正義」、「性質」「性格」「本質」「特質」「特殊な属性」「事物」、仏典では「法」「正法」「教法」「如法」「妙法」「法門」といった意味が挙げられる(『梵和辞典』)。

宮坂師は、こうした語源的(辞典的)には「保つもの」(能動形)と言われる「dharma」に「保たれるもの」(受動形)の用例があること(前掲の論文、註2)等々を証左に、「dharma」は「保つもの」ではなく「保たれるもの」であると結論づけられた。

余談ながら、仏教で言う「法 dharma」を「存在(するもの)」と和訳する場合、心しなければならぬのは「存在」という語(eon,ousia,esse,Sein,être,being)が西洋哲学では重要な哲学的概念である故、安易に用いない方がいいということである。「存在」と言えば、

- ①他に依らず、それ自体が在るもの。「実在」。仏教で言う「実有」。
- ②認識対象としての現象態。仏教で言う「境」(色・声・香・味・触・法の「六境」など)。
- ③現実として私たちの前に在るもの。「実存」。
- ④ものごとの本性・本質。

といった意味合いが思い浮ぶが、西洋哲学では、

○パルメニデスの「物理現象」と「本質存在」。

○アリストテレスの「ウーシア(実体)」「(普遍的な性格(質料と形相)と究極の存在者(神))。

○カントの「物自体」(理性・論理でのみ捉えられるアプリアリな実体・本質)。

○「物自体」を「意志」としたショウペンハウエル。

○「物自体」を退け主観や自我の实在を言うヘーゲルやフィヒテ。

○そしてハイデガーの「存在 Sein」と「存在者 Seiende」。

等々、その他の哲学者のものも含め、「存在」論は現象学や認識論や形而上学などと相俟って西洋哲学の根幹をなしている。なかにはインド哲学が説いた「ブラフマン」「アートマン」、あるいはアビダルマが言う「法」に通じるものもある。

●「清浄 viśuddhi viśodhana」について

私見ながら、釈尊の「無執著」(煩惱の否定)にはじまる仏教(思想)史は、人間の本能的な「業欲」(煩惱)の代表である「愛欲」を、密教の菩薩のサトリの境地から「自性清浄」と肯定的に言うてのけた『理趣経』(=『金剛頂経』)(煩惱の昇華・肯定)で極まったと思う。

仏教は釈尊の当初から「無執著」(煩惱の否定)を根本にすえながら、一方で「清浄心」を早くから問題にしてきた。例えば、原始仏教(パーリ『南伝大蔵経』増支部、『増一阿含経』など)や部派仏教(『大毘婆沙論』)では「心性本浄」が説かれ、大衆部やその他の部派ほか『順正理論』『成実論』は「心性本浄、客塵煩惱」を批判的に問題にし、大乘に至って『般若経』系が「空」を「自性清浄」とするとともに、『法華経』が「仏種 buddha-goṭra」を、『涅槃経』が「(一切衆生必有)仏性 buddha-dhātu」を、『勝鬘経』『如来蔵経』『楞伽経』『究竟一乘宝性論』『大乘起信論』などが「如来蔵 tathāgata-garbhā」を、さらに唯識の「四種清浄」などとあいまって、大乘では「(阿耨多羅三藐三)菩提心(anuttara-samyaksam) bodhi-citta」を言い、密教はこれを「(白浄)菩提心」とした。

この「菩提心」を、大乘では「因位」(=修行者の立場)における「サトリを求める求道心」あるいは「大悲利他・衆生済度の心」を言うが、密教では「果位」(サトリの境地)から「サトリ」そのものを意味し(『密教辞典』)、「菩提」と「心」を共に「空」の同義とし、「白浄信心」(『大日経疏』)・「信心」(『三昧耶戒序』)とも言う。大乘と同じく「上求菩提」と「下化衆生」の心のことであるが、『菩提心論』は「菩提心」に勝義心(=深般若心、一切智智を求める心)と行願心(一切の衆生を済度してやまない利他の心)と三摩地心(=大菩提心、生仏不二・凡聖一如の密教的サトリに住する心)の「三種菩提心」を説く。『理趣経』はこの「菩提心」の堅固でゆるぎないことを「金剛」と言い、「金剛薩埵」をそのモデルとした。

『理趣経』が取り上げた「愛欲」は、言うまでもなく人間の根本煩惱であり、本能的な「業欲」であり、「生命欲」「生命の業火」であり、釈尊が言った「無知 avidyā」であり、「苦」のもとであり、「迷妄」「蓋障」「顛倒」「染汚」であり、「サトリ」の障害であって、調伏・摧伏・抑滅・否定されるべきものであり、出家修行者にとって最大の難問であり、仏教(思想)史にとっても最重要課題であった。それを『理趣経』は「自性清浄」と言うてのけ、「菩提心」を具有する密教の菩薩(金剛薩埵)の心位では衆生を救済・愛護してやまない純粋な利他の意志だとして、「無執著」「無我」「無自性」「空(性)」といった仏教の中心思想の極まりに立ったのである。

●「般若理趣 prajñāpāramitā-naya」について

経題でもあり、各段にも決まったように登場する「般若理趣 prajñāpāramitā-naya」という術語であるが、これを私は大乘の「般若波羅蜜多」(サトリの智慧=「無自性」「空」)の密教的「道理」(密教教義化)と受けとめた。それはすなわち、一語にして言えば(密教の菩薩「金剛薩埵」の)「大楽」の法門、その内実は第十七段に説かれる「大欲」「大楽」「大菩提」「摧大力魔」「遍三界自在

- 主]の「五秘密」、そして具体的には各段のテーマ(「釈義」の部分)十七例である。
- 初段では、「一切清浄」の具体例としての「十七清浄」、金剛薩埵のサトリの境地。
 - 第二段では、「四智」の(衆生と仏ともに)「平等」(「四平等」)、大日如来の境地。
 - 第三段では、「五種「清浄」の「無戲論性」、降三世明王のサトリの境地
 - 第四段では、「一切(諸)法」の「四種の清浄」、観自在菩薩のサトリの境地。
 - 第五段では、「四種の施」とその「利益」、虚空蔵菩薩のサトリの境地。
 - 第六段では、「一切如来」の「四(種智)印」、金剛拳菩薩のサトリの境地。
 - 第七段では、「転字輪観」と「無相平等」、文殊師利菩薩の「転字輪観」による金剛薩埵のサトリの境地。
 - 第八段では、「四智」の「四平等」と「入マンダラ」、纒発心転法輪菩薩のサトリの境地。
 - 第九段では、「一切如来」への「四種供養」、虚空庫菩薩のサトリの境地。
 - 第十段では、「四種忿怒」、摧一切魔菩薩のサトリの境地。
 - 第十一段では、「般若波羅蜜多」の「四種性」、金剛手菩薩(=普賢菩薩=金剛薩埵)のサトリの境地、初段～十段の「般若理趣」を総括。
 - 第十二段では、「四種蔵」、外金剛部護法神のサトリの境地。
 - 第十三段では、「四摂法」、七母女天の調伏の境地。
 - 第十四段では、「一切(諸)法の平等・超言語・虚空」、三兄弟のサトリの境地。
 - 第十五段では、「四波羅蜜」、四姉妹天のサトリの境地。
 - 第十六段では、「般若波羅蜜多」の「四種(特)性」、大日如来の境地。
 - 第十七段では、「般若波羅蜜多」の「五秘密」、五秘密尊の境地。

然るに「理趣」とは、サンスクリット「naya(√nī)」を不空三蔵が漢訳したものであるが、私にはいま一つピンとこないものがある。なので私は、「naya」の原意が「～に導くこと」「行為」「態度」「思慮」「分別」「原理」「教義」などであり、仏教用語としては「理趣」「正理」「道理」「方便」「法門」「実相」「意趣」(『梵和大辞典』)などであることから、「(密教的)意味づけ」といった意味で「道理」という和訳を選んだ。

また、「般若」すなわち「般若波羅蜜多 prajñāpāramitā」は、周知の通り『般若経』系の中心的大乗思想であり、『理趣経』はその経題が示す通りこの「般若波羅蜜多」を主題とする『般若経』である。

「般若波羅蜜多 prajñāpāramitā」とは、「彼岸(サトリ)に達せられた智慧」「覚られた智慧」すなわち「サトリの智慧」、つまり大乘の「無自性」「空(性)」を意味するのであるが、この「prajñāpāramitā」を「智慧(prajñā)の完成(pāramitā)」と和訳する著名な研究者がおられ(『般若心経 金剛般若経』中村元・紀野一義、岩波文庫)、それに追随する仏教研究者も少なくない。

私には「prajñāpāramitā」を「智慧(prajñā)の完成(pāramitā)」とする理由がわからない。おそらく、然るべき理由があるに相違ないが、先ず「pāramitā」を「完成」とする方には、過去受動分詞である「pāramitā」の「ita」を「完成」と能動的な名詞に訳す文法的な根拠を明かしていただきたい。加えて、私は「完成」という日本語がそもそもこの場合不適切だと思うのだが、「完成」はベストの訳語だろうか。何故なら、「彼岸(サトリ)に達せられた智慧」「覚られた智慧」とは、瞑想の集中のさなかに顕現する無分別智(覚智)・直観智であって、学習や経験を積み上げて「完成」する学習知・経験知(分別知)ではないからである。ちなみに「para」には「完成」の意味はなく、「pāra-gata」にもなく、わずかに「pāra-ga」に「学習し尽くす」「完成する」があるが学習知・経験知(分別知)の意味である。

●「三摩耶 samaya」について

『理趣経』にたびたび出てくる「三摩耶 samaya」であるが、漢訳では「三摩耶」「三昧耶」と音訳されているだけで訳語がなく、意味するところが一定せず多様でまたよくわからない。

まず「samaya」(sam√i)の原意は、「一緒に来ること」「会合の場所」「一致」「同意」「取り決め」「約束」「時間」「時」「機会」「慣習」「しきたり」「規則」「戒め」「教義」「教え」などで(『梵和大辞典』)、モニエルやマクドーネルの梵英辞典も同様である。私が最も信頼を寄せているサンスクリット学者の先輩から、「sam√i」は「sam√gam」と同じで、もともとのイメージは「一緒になる」「一致・同意する」「二つが一つになる」であろうという助言をいただいた。

仏典の用例ですぐ思いつくのは、経典の初めに「ekasminn samaye(一時、ある時)」でよく登場するが、『理趣経』では単に時間的な「一時、ある時」ではなく、法身大日の「常恒説法」とそれを聴かんとする金剛薩埵たち菩薩衆の「阿吽の呼吸」が一致した「一時、ある時」である(『密教辞典』(佐和隆研編、法蔵館)所収の「五成就」に基づく先輩サンスクリット学者の助言)。

もう一つ、ご真言の用例であるが、「おん さんまや さとばん Om samaya satvaṃ」((仏と)平等(一如)の薩埵(金剛薩埵)に帰依します)、「おん さんまやさ とばん Om samayas tvaṃ」(オーン、(菩提心を発起した)あなたは(仏と)平等(一如)です)、「おん さんまや すとばん Om samaya stvaṃ」(オーン、(衆生と仏との)平等(一如)よ、金剛薩埵(ストヴァン)よ)などがあり、「平等」「一如」「不二」「一体」という意味である(『智山の真言 常用経典における真言の解説』(智山伝法院選書15)参照)。

加えて、金剛界マンダラの「三昧耶会」は「成身会」の諸尊の「持ち物」(仏器など)や「印」で表した集会図であり、「持ち物」(仏器など)や「印」は諸尊を象徴(標幟)する「三昧耶形」で、諸尊と「不二」「一体」という意味である。

然るに、「三摩耶 samaya」について伝統教学はどう言っているかと思い『理趣釈』を見ると、これがまた「(仏と衆生の本来)平等」「(衆生を救済する仏の)本誓・誓願」「(救済されて障礙が除かれる)除障」「(衆生が迷妄から目覚める)驚覚」と言い、あるいは「曼荼羅」(一切如来が覚った真実相、あるいは平等の世界)と言い、あるいは「期契(予め期せられている)約束」(「本誓」と同義?)と言い、あるいは先ほどの「時」だと言い、しかも当該箇所訳語を「言わずもがな」のように特定しない。

著名な密教学者とは言えば、『理趣釈』の説を頭に置きながらも、あるいは「曼荼羅」という意味から「(一切如来が真実世界を覚った)智慧」と言い、また「象徴(する)」といった語を用いている。

そこで、大師の『理趣経解題』を見ると、「等持」(平等撰持)＝入我我入、あるいは「誓約」とある。「等持」(平等撰持)＝入我我入は明解である。『理趣釈』を見ていたはずの大師が『理趣釈』にない訳語を自ら造語しているところが意味深い。「等持」(平等撰持)は私が「三摩耶 samaya」に従前から抱いていた基本イメージの「衆生と仏の不二一体の境地」と同義である。

なお、各段最後の<(本誓の)(心)真言>の部分によく出てくる「三摩耶 samaya」であるが、「象徴(する)」という取り方もうなずけるが、私は大師(『理趣経解題』)に倣って「本誓」とした。

余談ながら、初段の《(本誓の)(心)真言》の下方に注記したのだが、不空訳が「大乘現證三摩耶」としている箇所が苦米地本では「mahāyāna-abhisamaya」となっている。「mahāyāna-abhisamaya」を普通に訳すと「大乘現証」であり、「三摩耶」に該当する語はない。仮に苦米地本と同文の原典を不空三蔵が見ていたと仮定すれば、不空は「abhisamaya」を「現証」と「三摩耶」の二通りにしている。この場合、「三摩耶」は無用である。

然るにまた、仮にそうだとした場合、「abhisamaya」(「現証」)は「abhi 現」+「samaya 證(ある

いは観)」と見られ、その際「samaya」(証・観)は「三密」加持によって「一切如来と不二平等になること」(「五相成身観」の「仏身円満 Oṃ yathā sarvatathāgata tathā ‘ham」)、あるいは「三昧智」「等覚」という意味にとってもいいのではないと思われる。

ちなみに、私は経題の「～真実三摩耶経」の「三摩耶」は宗祖大師の『真実経文句』にもあるように「～真実である「等持(平等撰持)」を説く経」とし、しばしば出てくる〈(本誓の)(心)真言〉に出てくる「三摩耶心」は「～を「本誓」とする心真言」としたほか、二ヶ所で『理趣釈』に従い「曼荼羅」と訳した。なお、『理趣釈』は経題「大樂金剛不空真実三摩耶経」の「三摩耶」と、それと同じ文脈の初段末尾の「(説)大樂金剛不空三摩耶(心)」の「三摩耶」について何も言わず、従って経題にある「三摩耶」を「本誓」とした『理趣経』の専門家筋の釈は、『理趣釈』の別な箇所「三摩耶」の釈の転用に相違なく、はたしてここは「本誓」でいいか疑問である。

●「平等 samatā」について

たびたび登場する「平等(性) samatā」は、「三摩耶 samaya」と近似であるが、不空三蔵は「samatā」を「平等(性)」とし「samaya」を「三摩耶」としてちがいを明確にしている。しかし、「平等(性)」の意味がいま一つ一何と何が平等なのかよくわからない。この「平等」、「自他平等」とか「無差別平等」とかの訳語が浮ぶが、私は『理趣経』の場合は「生仏不二」(衆生と仏は本来不二、「凡聖不二」、「煩惱即菩提」という意味での「平等」、すなわち金剛薩埵の心位(境地、立ち位置)ととった。

余談ながら、『理趣経』には「現等覚 abhisambodhi」「正等覚 samyaksambodhi」という語がよく登場する。この「現等覚」「正等覚」の「等」にあたるサンスクリットは副詞の「sam」で、「完全」「結合」という意味を表わす。「全く」「一緒に」という意味にもなる。故に「等覚」の「等」は「完全な(サトリ)」ととるのが適当のように思われるが「完全なサトリ」とは何か、具体的なイメージがわからない。「結合」の意味だと「釈尊のサトリ」と結合(一致)したという意味で「等(しい)」はわかる。『理趣経』の場合は「一切如来(五仏)のサトリ(五智)」と結合した「等(しい)」と言っていいだろうか。サンスクリットはなぜここに「等 sam」をもってくるのか、私にはあいまいに「完全な」というより具体的に「釈尊のサトリ」や「五仏の「五智)」と結合(一致)した「同等」「同一の」の境地が思い浮ぶ。

ちなみに、『般若心経』の最後の心真言「ギャーテー ギャーテー ハーラーギャーテー ハラソーギャーテー ボージー ソワカ」の「ハラソーギャーテー」は「pārasaṃgate」で、「彼の岸(=サトリ) pāra」に、「完全に sam」ではなく、「みな共に(結合一致して) sam」「到達することよ gate」ととるべきだと私はかねて言っている。「みな共に(結合一致して)」でなければ大乘(のサトリが「自他平等」「無差別平等)」ではないからである。「普回向」にも「皆共に仏道を成ぜんことを」とある。

この「sam」から「sama」(「平らな」「並行の」「類似の」「同様の」「同等の」「同一の」「等しい」「公平な」「中立の」「正しい)があり、それに「tā」(「本性」「性」「本質)を付けたのが「samatā」である。「三昧」「三摩地」「等持」「禪定」の「samādhi」も「sam」「ādhi」である。原意は「結合」「組み合わせ」であるが、「等持」の「等」は「sam」である。「等持」は心識作用が一点に結合してそれと「同一の」状態になっていること。「等 sam」は、釈尊のサトリや一切如来(五仏)のサトリに「同一」「同等」「等しい」ということを具体的にイメージすべき語ではないか。

ことほど左様に、「sam」と同様、サンスクリットの接頭語類「adhi」「anu」「apa」「abhi」「ava」「ud」「ni」「nis(nir, nis, niḥ)」「pari」「pra」「prati」「vi」「vyava」等々、和訳の際その原意をおろそかにはできない。

「アビダルマ abhidharma」を「対法」と訳す(『梵和大辞典』)。これを普通「法に対する研究」などと言うが、「abhi」は単に「対する」といった程度の接頭語だと私には思えない。「現等覚 abhisamaya」や「正等覚 abhisambuddha」もそうだが、「対する」だけでなく「現実的にまのあたりに

する」こと、すなわち「アビダルマ abhidharma」は「法（存在を存在たらしめている「自相 svalakṣaṇa」）を現実的にまのあたりにして観察・分析することであり、「現等覚 abhisamaya」「正等覚 abhisambuddha」とは仏との不二一体が実際に現前すること。「abhi」は「対するもの」との一体的な意味が強いと私は考えている。

●「金剛 vajra」について

周知のように、「金剛」とは金剛石すなわちダイヤモンドのことであり「堅固」「不壊」の象徴であるが、密教ではとくに仏智（サトリの智慧）の堅固さの象徴であり、仏智（サトリの智慧）で煩惱を「破碎・摧伏」する武器である（＝「金剛杵」）。「金剛杵」には五鈷杵・三鈷杵・独鈷杵とがあるが、一般には三鈷杵のことを指す。同時に、堅固・不壊の「菩提心」と同義であり、また『金剛頂経』系では「真理」という意味にも使われる。

ちなみに、「四智」に「金剛」をつけた「四智護」は、次のようである。

Om vajrasatva-saṃgrahād

オーン、「金剛薩埵」（のように本有菩提心を自覚し、堅固な金剛智）を保持するから（大円鏡智、阿閼如来の境地）、

vajraratnam anuttaram

「金剛」の（ように堅固な自他「平等」のサトリの智慧である）宝（如意宝珠）はこの上なきものである（平等性智、宝生如来の境地）。

vajradharma-gāyanaiḥ

（大悲を以て衆生をよく観察し）「金剛」の（ように堅固不壊の）「教法」を詠ずる（説法すること）によって（妙観察智、阿弥陀如来の境地）、

vajrakarma-karo bhava

（あなたは）「金剛」の（ように堅固な）利他行を実践する者となれ（成所作智、不空成就如来の境地）、

●「一切如来 sarvatathāgata」について

密教、とくに『金剛頂経』系の經典で「一切如来 sarvatathāgata」と言えば、『理趣釈』が言うように「（金剛界の）五仏」（大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀（無量寿）如来、不空成就如来）の総称である。原語は単数形であるから「一切の如来たち」（複数）と訳さず「一切如来」（単数）という術語に訳す。

ちなみに、「一切如来 sarvatathāgata」を「すべての如来」と現代語訳している研究者がおられるが、「一切如来」は、『理趣釈』が言うように、「五仏」のことを指す術語であるから「すべての如来」とはせず「一切如来」（五仏）とすべきだと私は思う。

●「印 mudrā」について

『理趣経』にしばしば説かれる「印 mudrā」であるが、もともとは「刻印つきの指輪」「印章」「封

印」「押した跡形」「表徴」「徽章」「(身体に印された神聖な)記号」「印契」、つまり「しるし(印・標)」のことで、仏典では「印」「印璽」、「印相」「印契」「手印」(仏尊が結んでいる手によるサイン)、密教では「印相」「密印」「印母」「結印」などと言い、本人を証明する「印章」(印鑑)と同じように、仏・菩薩のサトリの境地や誓願や仏徳や利他行の真実性を証明する標幟を意味する。通常、真言宗系で「印」と言えば「智拳印」や「法界定印」や「不動剣印」「施無畏印」「与願印」「降三世印」のような「手印」(身密)のことであるが、密教経典では広く「手印」「三昧耶形」「尊像」「種字」「真言」の意味も含む。

第六段では、「一切如来」の「智印」として四種説かれた。すなわち、仏・菩薩の内証の表象である「身密印」(「手印」)、「種字」「真言」によって仏・菩薩を表象する「語(口)印」、仏・菩薩の観想を表象する「意密印」、仏・菩薩の「三昧耶形」「尊像」を表象する「三密印」である。すなわち、「智印」は仏・菩薩のサトリの境地を標幟する「印契」。「印」=「手印」、「契」=「金剛杵」「蓮華」「劍」「羅索」など。

余談ながら、よく「大印 mahāmudrā」という術語に出会うが、例えば「光明真言」の「まかぼだら」=「大印」は右手の五指を伸ばした「五色光印」のことである。

●「輪 cakra」について

「輪 cakra」とは、「輪宝」「法輪」のことで転輪王の武器。四輻輪・五輻輪・六輻輪・八輻輪・十二輻輪・百輻輪・千輻輪などがあり、平板円形の金属製円盤でその最外部に付けられる鋒の突起が剣先鋭く、回転すれば破壊力が増す。これを煩惱を断ち切る「教法」に喩え、「説法」することを「転法輪」と言う。

『理趣経』では、第八段で阿閼如来の「金剛輪」、宝生如来の「宝輪」、阿弥陀如来の「法輪」、不空成就如来の「羯磨輪」の「四輪」を説き、それらはまた初会『金剛頂経』の四大品(金剛界品・降三世品・遍調伏品・一切義成就品)に説かれる「金剛界曼荼羅」「降三世曼荼羅」「遍調伏曼荼羅」「一切義成就曼荼羅」だと言う。

「輪」が「曼荼羅」の意味に転用されるのは、金剛界マンダラの諸尊が皆「月輪」のなかに描かれていることとか、第八段の「纒發意菩薩理趣曼荼羅」や第十一段の「降三世教令輪曼荼羅」などでは、中心部分の「輪円」が「輪宝」(「法輪」)で描かれていることとか、あるいは「曼荼羅」をそもそも「輪円(具足)」と言うことなどに起因していると考えられる。

ちなみに、「曼荼羅 maṇḍala」とは、「本質」「中心」「神髄」「醍醐味」という意味の「maṇḍa」に、「成就」「所有」という意味の「la」を後接した、「本質を有するもの」という意味で、万徳円満な仏果、すなわち菩提の境地のことと言われる(『密教辞典』)。

これが、言うならば「曼荼羅」の伝統的な解釈なのであるが、『梵和辞典』によれば、「maṇḍa」は「煮た穀物の浮きかす」「乳脂」「アルコール(の濃い部分)」「餅」「汁」「米汁」「果汁」「醍醐」「清涼」、または「座」「場」という意味であって、「本質」「中心」「神髄」などという意味はない。また、「la」には「成就」「所有」などという意味も見当たらない。ただし「maṇḍala」には、「円形の」「円い」、「円」「円盤」(とくに月)、「球体」「車輪」「光輪」、「(円状の)結界」「聖域」、仏典では「輪」「円」「円満」「円満輪」、「円陣」「集団」「衆」、「界」「圏」といった意味があり「輪円(具足)」はうなずける。

「輪 cakra」と「曼荼羅 maṇḍala」の近似性をまとめれば、「輪宝」(「法輪」)を(空中に投げて)転ずること、すなわち諸尊が教法を転ずること(=説法すること)、その諸尊が三昧耶形をもって説法する姿を描いた集会図としての「曼荼羅」、ということになるろうか。

●「百字偈」について

この稿の最後に、亡き師父が「理趣経偈のインド密教教義」という論文に残した「百字偈」の和訳(『梵藏漢对照般若理趣経』(梅尾祥雲・泉芳環共編、所収の「智山勸学院本」の和訳)を紹介しておこうと思う。

父が「理趣経偈のインド密教教義」を発表したのは昭和三十九年で、ちょうど私がサンスクリットを原實先生(東京大学名誉教授、サンスクリット学の権威、辻直四郎博士の愛弟子、当時東大印哲の新進気鋭の講師で、専任教授の田中於菟弥先生がインド遊学中でお留守のため、早稲田大学にご出講)から学びはじめた年である。その時の教科書だった『實習梵語學』(荻原雲來博士)の末尾に、「智山勸学院本」の『理趣経』第十七段の原文が掲載されているのだが、当時は『理趣経』も知らずただの仏典用例だと思っていた。

yāvad bhava=adhiṣṭhāne ‘tra bhavanti vara=sūrayaḥ
tāvāt sattva=artham atulaṃ śakyāḥ kartum anirvṛtāḥ
(父の和訳)ここなる生死の住処に勝慧者たちが居る間、
その限りは彼らはたぐいなき有情の利益を作してネハンに入らない。

prajñāpāramitā=upāya=jñāna=adhiṣṭhāna sādhitāḥ
sarvakarma=viśuddhyā tu bhava=śuddhā bhavanti haṃ
(父の和訳)般若波羅蜜多は方便と〔合一平等なる〕智の加持によって完成される。
一切の法は〔自性〕清浄であるから諸の生死は清浄である。
※「karma」を父は「dharma」に読んでいる。

rāga=ādi=vinayo loka ā bhava=agrāt sakṛt sadā
teṣāṃ viśodhana=artham tu vinayan=dātavān bhavam
(父の和訳)貪欲等による調伏(=所行)は、世間において生死の際にまで常に、
それら(世間の悪趣)を清浄にするために、生死を調伏しつつ浄除する。

yathā padmaṃ surakṣaṃ tu rāga=doṣair na lipyate
vāsa=doṣair bhava nityam na lipyante jagaddhitāḥ
(父の和訳)譬えば蓮華が妙染にして、しかも貪欲の過に染められない如くに、
生死界の中において住の過によって世間の利益は常に汚されない。

mahā=rāga=viśuddhās tu mahā=saukhyā mahā=dhanāḥ
tridhātu=īśvaratāṃ prāptā artham kurvantu taṃ dṛḍham iti hā
(父の和訳)〔勝慧者たちは〕大欲清浄であり、大安楽・大富饒であり、
三界の自在者たることを得て、その利益を堅固に作せ。曰く、Hā

※一句目の「bhava」、二句目の「bhava」、三句目の「ā bhava=agrāt」「bhavam」、四句目の「bhava」であるが、師父は「生死」と和訳した。おそらく、「bhava=agra」が「有頂天」と訳す熟語であることから、「有頂天」(「非想非非想処」)を「涅槃処」=「生死の境」とする考え方によったのだろう。あるいは冒頭の不空訳「乃至盡生死」に倣ったかも知れないが、「私たち人間が生死をくり返す輪廻などの迷妄の世界」の意味だろう。私は「bhava」を「有」と訳した。「三界(欲界・色界・無色界)」「世間」、すなわち「我執のステージ」「私たち人間が我執に生きる迷妄のステージ」「私たちが認識対象を「有」と受けとめる意識世界」といった意味である。「百字偈」

には、「世間 loka」「三界 tridhātu」「有情 sattva」（「有 sat」）という語がほかに見られることも背景にある。

事のついでに、「百字偈」には、「ロイマン本」（原本）とそれを校訂した「智山勸学院本」のちがいの例があるので、原文と私の拙い和訳を紹介しておく。

●『ロイマン本』。太字付線部分が『智山勸学院本』と異なる箇所。

rāgā=**adhivinayo** loka ā **bhavāt pāpakṛt** sadā ;
teṣāṃ viśodhana=artham tu vinayann **ā bhavāt** bhavam
（彼ら賢者（菩薩）たちは）世間において、常に、「有」の際（「有頂天」）より悪趣まで、一度に、諸欲を大いに調伏し、かつ、それら（諸欲）の浄化のために、「有」の際まで「有」を調伏する。

●『智山勸学院本』。太字付線部分は『ロイマン本』と異なる箇所。

rāgā=**ādi-vinayo** loka ā **bhava-agrāt sakṛt** sadā
teṣāṃ viśodhana=artham tu vinayan **dātavān** bhavam
（彼ら賢者（菩薩）たちは）世間において、常に、「有頂天」（「非想非非想処」）より、一度に、欲等を調伏し、かつ、それら（欲等）の浄化のために、「有」を調伏し除去する。